

やせ細った二本の足がかかとを浮かせ、真夜中の街道を彷徨っていた。空にはどろり、鈍い光を放つ月が雲の切れ間から覗いていた。流行病にやられた佐の助は高熱のせいで、今自分がどこを歩いているかもさえ解らずにいた。

「あうあう、女をよこせ、おい、いるのはわかってんだ」

声にならぬ呻きは盛りのついた畜生の雄叫び、汚れたふんどしを地面に引きずりながら右手に一物を握る。カラスが鳴き、生暖かい風が汗ばんだのど元をなめていく。佐の助の血走った目が左右に振られ、人の気配を捜した。固く閉じられた木戸の向こうでは、鎌を握った亭主が娘と女房を守ろうと外を伺っていた。竹が弾けるように通りのあちこちで、佐の助の奇声が闇を突き刺した。その度に村人達は身を固くし、頭を抱えた。もう少しもう少しの辛抱、明日の朝には奴も死ぬ。今までの者がそうであったように、この病に取り付かれたならば命はない。たっぷり2日高熱に苦しみ、3日目の夜に気が狂う、そして朝を待たずに息絶えるのだ。事の始まりは田植えも済み村が一息ついた頃だった。神社近く池の畔、弱って飛べずにいる黒鳥を百姓の喜助が見つけた。米はつくれど粟ヒエもまともに食べぬ小作の身、今日はいっている、喜びいさんで家に持ち帰った。夕餉、羽をむしり取られた鳥肉が囲炉裏にかけられ、久しぶりのご馳走に家族は舌鼓を打った。その夜、突然、子供が苦しみだした。どうしていいのやら、喜助の妻はおろおろするばかり、泣きながら我が子の小さな背中をさすった。しかし間もなく、喜助と妻も同じように腹を抱え脂汗を流し出した。4日目の朝、一家もろとも死に絶えた。こうなっては葬儀を執り行う喪主がない、仕方なく分家が通夜を開いた。通夜振る舞いの席、嵩ましのため井戸の水で薄めた酒を片手に、村人達は噂した。

「欲を出すものでない、病の鳥など食って酷い食あたりにあったのだ」

翌日の葬式で全て終わった、誰もが疑いもしなかった。しかし、それは始まりに過ぎなかった。まもなく、村のあちらこちらで同じような病人が現れた。暦をめくるようにキツカリ4日目で息絶える奇病だった。ただ、不思議なことに病にかかるのは若い者ばかり、特に四十前のこの先村を背負っていかねばならぬ者達がことごとく倒れていった。残された年寄りは大変な働き手を失い途方に暮れるが為す術もない。こうなると誰かに責めをなすりつけなくてはならない、それが世の常だった。やがて非難の矛先は村を取り仕切る庄屋に向けられた。奴はあれこれやごたくを並べ、古来より受け継がれし式年大祭をほったらかしにしている。奇病はその報いに違いない。村には神社境内の御柱を五十年一度、村人総出で立て替える習わしがあった。しかし、肝心の庄屋は話を進めようともせず、のらりくらり逃げていた。そんな最中、降って湧いたような災難、噂は熱を増し声高に庄屋を批難する者も現れた。その急先鋒が佐の助だった。口達者で無類の女ずき、何人娘が手込めにされたかしのれない。こうなることは誰もが予想していた。

「おい、そっちがそのつもりなら戸をたたき割るぞ、とっとと娘を出せ。」

生ぬるい風が吹き、犬が切ない声で鳴いた。朽ちかけた柿の木の下で赤毛の雌に薄汚れた白い犬が覆い被さり、組み伏せられた雌犬は耐えきれず牙をむいた。佐の助

は薄ら笑いを浮かべたかとおもうと、直ぐに不機嫌そうに眉間に皺を寄せた。

「まったく、畜生のくせによろしくやってるんじゃないねえ」

言い終わらぬうちに足下の小石3つばかりを犬達に投げつけた。キャンと一鳴き、石の一つが雌の脇腹に食い込んだ。いいところを邪魔された雄犬が目を血走らせ、佐の助に吠えたてた。今にも飛びかからんばかりの殺気、しかし急に様子が変わり切なげな声でもがきだした。何の事はない、石をぶつけられ驚いた雌犬から我が身が抜けなくなったのだ。月明かりの下、地面に落ちた二匹の影が一つの化け物のように怪しく身をくねらせた。しかし佐の助は何事もなかったように歩き出した。格子から覗いていた村人は遠のいていく背中を息を殺し見送った。それからどれ程たったろうか、草履はどうになくなり、彷徨い歩く足の爪が剥がれていた。炎のように熱い身体は火の玉のように揺らめき、もう、どこで倒れてもおかしくなかった。絶え絶えの息、天と地がぐるぐる回った。せめてもう一度、女を味わってからあの世に逝きたい。そんな執念もさすがに薄れかけた頃、目の前の小道を小走りで横切るムッチリとした尻を見つけた。女だ、佐の助の手が反射的に女の両肩を掴み、強引に引き倒した。不意打ちをくらった女は地面の石に頭を打ち付け、うっと呻き声をあげた。着物の裾が乱れ、月明かりにあらわになる太股、朦朧としながら女は必死に逃げようと試みた。そうはさせない、佐の助は女の着物をまくりむしゃぶりついた。顔など確かめる暇はなく、股ぐらから漂う雌の臭いが佐の助を一気に駆り立てた。あらがい泣き叫ぶ甲高い声、黙れとばかりにフンドシをその口に押し込んだ。獲物を前に体中の血が泡をたて煮えたぎった。

「がまんせえ、すぐにええようにしたる」

着物の紐をほどくと、たわわな乳房がだらりこぼれた。口元に笑みを浮かべ、女の両足を抱え狙い定め、一気に自分を押し当てた。女は弓なりに身体をのけぞらせ、乳房はさらに前へと押し出された。これだ、これが欲しかった。佐の助は身体を揺らしながら、無精ひげで覆われた口で女の肌に噛みついた。

「うえ、なんじゃ」

突如、舌先に強烈な違和感が走り背筋が震えた。女の肌にあった出来物が潰れたらしく、はじけた膿が一気に口へ流れ込んできた。強烈な苦みと生臭さが鼻の奥を突き抜けた。こらえきれない吐き気、佐の助は胸をかきむしった。しかし、それから後は覚えていない。苦しみに倒れ込む瞬間、一陣の風が吹き、女のざんばら髪を後ろにはらった。月明かりに浮かんだ顔にどこか見覚えがあった。口から泡をふきながら佐の助ははっとした。

「もしや、おまえはお清では・・・」

おびえた女の目がこちらを見据えていた。

行灯の灯りが男の影を障子に浮かび上がらせていた。左手で顎をなぞり右手に持った煙管で小刻みに肩を叩く仕草は苛立ちに満ちていた。男の名は浅間久平、8代続く大百姓であり村を束ねる庄屋の当主だ。敬われるべき実力者であるにも関わら

ず流行病に端を發した誹謗中傷に苦虫を嚙み潰つぶす日々が続いていた。確かに御柱の習わしは痛いほど承知している。しかし、二の足を踏むにはそれなりの理由があった。なにせ儀式にかかる費用全てを庄屋一人が背負わねばならぬ決まり、先祖の書き残した勘定帳によると、少なくとも蔵ひとつ消える出費は覚悟せねばならない。さらにここぞとばかり村人達から酒宴をせがまれ、酒代だけでも大そうなもだと余白に嘆きが書かれていた。そんな物を読んでしまうとなぜこの当たり年に自分当主なのかと親を恨んだ。村の者は九平のことをけちだしみつたれだと揶揄すがやっと貯めた金を惜しんで何か悪い、何度も喉まで悪態が込み上げた。しかし、言えば火に油を注ぐことになる。九平はじっと耐え聞き流していた。そんな最中、九平を狂喜させる話が舞い込んだ。それは下男、仁蔵が村外れの小道で佐の助に出くわした事に端を發した。流行病にやられ佐の助は幾ばくもない、仁蔵は村人からそう聞いていた。しかし、病んでいる様子など微塵もなく、それどころか鯉の生血でも飲んだかと思うほど顔の色艶がよかった。不思議に思い何があったのか佐の助に尋ねた。するとよくぞ聞いてくれたと前の晩の出来事を語り出した。流行病にかかり3日目の夜、朝には死んでいるのだと妬けになり村を彷徨っていた。熱にやられ頭は朦朧、身体は鉛、息が出来なくなりもうだめかと倒れる寸前、目の前を女が横切った。これ幸い、押し倒し美味そうな乳房を嚙みついた。すると得体の知れぬ汁が口の中に飛び込んできたかと思うと強烈な生臭さが鼻の中を駆け上った。しかし、そこから後は覚えていない。目が覚めると不思議なことがおきていた。辛かった身体が何事もなかったように楽になっていた。佐の助は狐に摘まれたようだと仁蔵に話したという。その話を聞き久平はひらめいた。これは金儲けになる。なにより話の最後、女はお清に似ていたという佐の助の証言に興味を湧いた。なぜなら久平は長年、お清という女を探し求めていたのだ。

「仁蔵はまだか」

影も見えなければ近づいてくる足音もないと外を見に行つた下女は前掛けを握りしめながら伝えた。久平は座布団に座り直しキセルをふかしはじめた。佐の助がお清を見たという小道を山に向かって登って行くと深い木々の奥にほこらがあると云われていた。ただそれは言い伝えであつて九平はおろか村人でさえ実際に目にした者はいない。しかし、あの近辺でお清が身を隠し住み着ける場所はあそこしかない。久平は仁蔵と数人の下男をほこらに差し向けた。

「のろまめが、先を越されたらどうする」

話の出所だつた佐の助はとうに始末し川へ流した。どうせ独り身の鼻つまみ者、死んだとて悲しむ者などいない。それよりこの話を他の誰かにしていなければいいが、久平は神に祈つた。なんとしても秘密裏に女を捕らえねばならない。焦りが久平の眉間に深い皺を刻ませた。

「旦那様、仁蔵さんがいま・・・」

女中が言い終わらぬうちに久平は玄関口へ走り出していた。草履もそこそこに家を飛び出すと門の向こうから左右に揺らめく提灯が近づいてくる。

「申し訳ありません。遅くなりました。どうにもれいの洞窟が探せませんで難儀しておりました。」

「なに、するとお清は見つからなかったのか」

息せき切って走って来たのだろう、仁蔵は手に持っていた手拭いを口にあて詫びた。

「結局、ほこらは見つけられませんでした。しかし、お喜びください。飛んで火に入るなんとやら、お清のやつキノコや木の実やら採りに来ていたところに運良く出くわしました。とっつかまえてやりました。」

仁蔵はどうだと言わんばかり自慢げに手振り身振りでその時の捕り物を演じてみせる。

「いやー、実はあんまり真っ黒なんではじめは熊かところちも震え上がりました。」

「余計なことはどうでもよい、お清はどこだ。どこにおる」

「あ、はい、ただいま。もうすぐこちらに参ります。」

まだ心の臓の高鳴りがおさまらないのか仁蔵は胸に手を当てた。一呼吸二呼吸すると今入ってきた門を指さし頷いた。程なく男達がかげ声と共に長持の竿を肩にかずきゆさゆさ敷居をまたぎ入ってきた。早く早くと久平にせかさされ長持ちは地面に降ろされた。二人は長持を挟むように立ち目を合わせ頷いた。

「でかした、5番蔵へ運べ」

久平は一番奥にある蔵を指さした。

蔵の厚い壁の内側は半分を土間、もう半分は庄屋の屋敷に不釣り合いな座敷牢で仕切られていた。長持は担ぎ手により土間の真ん中に静かに置かれた。久平は人払いし黒光りする太竿に手をかけ一気に引き抜いた。開けぬまえから中で暴れる音がする。怯むことなく蓋に手をかけ持ち上げた。得も言われぬ生臭い臭いが中から溢れ出してきた。九平の顔がゆがんだ。耐え切れず蓋を投げ捨て着物の袖で鼻を覆った。それでも気の遠くなるような悪臭が這い上がってくる。吐き気に堪えながら箱の中に視線を戻した。ぼろ切れ同然の着物の上から麻縄で縛りあげられた女が横たっていた。叫んではいるが猿ぐつわをそれているせいで口では言葉にならない。壁に掛けてあった行灯を外し女の頬の側へ近づけた。鋭い目がこちらを睨み付ける。九平は記憶の中にあるお清の顔を女に重ねた。出来物に覆われトカゲのような肌はしていたが確かに面影はあった。してやったり。笑みかこぼれた。行灯を傍らに置き、長らく会っていなかった級友と再会したように目を輝かせた。

「久しぶりじゃのう、お清、ワシだ久平だ、解るか？」

お清は答えなかった。それどころか顔をそらし身体を長持の壁に打ち付け暴れつづけた。呆れた久平は暫くほおっておいた。やがてお清に疲れが見え肩で息をし始めた。げほげほと咳き込む姿に九平は哀れみの表情を浮かべた。

「そう怒るなお清、こうでもしなければおまえはここへは来んだろう」

「あたりまえだ、おまえなんぞの顔など」

「なんと、まだ根に持っているのか。お前も執念深い女よ」

「誰がそうさせた、あんただろ。」

お清は長持から身体を起こし顔を突き出した。ささがれた肌、鼻の頭には今にも潰れそうな大豆ほどの出来物が膿をたっぷり蓄えていた。漂う悪臭から逃れようと九平は袂から手ぬぐいを取り出し鼻にあてた。しかし鼻が覚えてしまったのか嗅覚

は混乱し、手ぬぐいで覆っていても悪臭が消えることはなかった。

「おまえの父は大罪を犯したゆえ裁きを受けた、ただそれだけの事よ。どこぞの男から何を吹き込まれたかは知らぬが真は一つ。まああの当時、疑うということを知らぬ子供だったということよ。それにな、たとえおまえの聞き知った事がそうであったとしてだ。昔の出来事などその者の立ち位置によって見方が全く変わるものじゃ。不条理と叫きたいなら叫けばいい。しかしのう、人の世とはそういうものだ。」帯に乗った太鼓腹を膨らませ久平はせせら笑った。行灯の光がその久平を切り抜き蔵の内壁に巨大な鬼の姿を映し出した。この男の内には本物の鬼が巣くっているのかもしれない。お清は恐ろしさに身をすくめた。

昔を思い出すお清の目から涙がこぼれ木綿の襟に染みていく。あれは今から10年前、お清に初潮がおとずれた13歳の夜だった。父、元吉と母、トメは娘が眠りについたので確かめそと家を出た。翌朝、両親の姿が家に無いことに気づいたお清は辺りを探した。納屋の農具はそのまま、朝仕事に行った様子もない。そうこうしていると日頃から親しくする馬喰のおばさんが青い顔で家に飛び込んできた。落ち着いて聞くのよと言いながら自分は慌てふためき支離滅裂な話をし始めた。なんでも昨夜、元吉とトメは代官によって火炙りの刑に処せられたというのだ。悪い冗談は止めてよとお清は笑った。こんな話、冗談でしないはよときつく抱きしめられた。「元吉さん達はご禁制の芥子の華を栽培していたってたいのよ。」

代官は部下に命じ街道沿い出回っているアヘンの出所を密かに探していた。近頃ある筋からある者が谷川の奥地を開墾し、芥子の華を栽培していると密告を受けた。情報を頼りに付近を探索すると芥子の華畑を探し当てた。首謀者を捕らえるべく待ち構えていると元吉とトメが現れた。直ちに捕縛し詰問すると二人は素直に白状した。罪状は明白、極刑やもなし、代官はその場で死罪を申しつけ畑もろとも火炙りにした。

「嘘よ、おとつあんもおっかさんもすぐに帰ってくるは」まだ幼い娘、事の重さを理解しろといってもそれは無理なこと、昨夜まで一緒にいた父母がもうこの世の者ではないなどと受け入れられるはずもない。お清は激しく首を振った。しかし現実は見えるかたちとなって現れた。黒こげの二つの固まりが戸板に乗せられ運ばれてきた。うち一つ、小さな遺体は右足のつま先だけが生焼けに残っていた。ずんぐり平べったい親指はお清とそっくり。『へんてこな指の形まで似ちゃったね』母、トメは自分の親指を娘の指に絡ませよくふざけていた。お清の顔からスーと血の気が引いた。立っていられなくなり気を失った。今、思えばそのまま死んだほうがよかった。しばらくして目覚めると馬喰のおばさんが通夜の用意をしてくれていた。しかし弔問客はおろか坊主さえ姿を現さなかった。無理もない、元吉との関わりを疑われたならば今度は我が身に累が及ぶ。結局、罪人の娘を引き取ろうという村人もなく、13歳の娘はすぐさま飢えと直面した。お清は

空腹に耐えきれず路地で物乞いをはじめた。とはいえ施しを与える者は多くはない、お清はいつも腹を空かせ街道を彷徨った。やせ細っていくお清を見るに忍びなく、早くのたれ死んでくれるのを村人達は願った。

「よう死なんかったもんじゃ、ま、女に生まれたおかげか」

久平は薄ら笑いを浮かべお清の着物の襟を肩まで引き下ろした。そこにはたわわな胸がはち切れんばかりにふくらんでいた。久平は提灯を近づけ光を肌にはわせた。話にあったとおりの乳首の周りを緑色の吹き出物が覆い、いまにも破けそうな膿が無数の目となりこちらを見た。

「なにするんだ、手を離せ」

「街道沿いのクモ助相手に身体で稼いだおまえが今更何を言う、まったく小娘いうても女は恐ろしい生き物よ。しかし、もうこの代物を買う男は間違ってもおらんじやろうて」

襟をつまんだ指を久平はそっと離し遠ざけた。

お清は当時、無宿人や籠かきの荒くれ者相手に身体を売っていた。孤児になってから既に3月が経っていた。13歳の娘にはじめからそんな知恵があったわけではない。ある日、空腹に項垂れ道祖神脇の大木に寄りかかっていると見知らぬ男が近寄ってきた。腹が空いているのかと聞かれ頷いた。男はお清の右手に握り飯をのせた。三日ぶりの食事、あつという間に胃袋に消えた。もっと欲しいかと聞かれ両手を出した。男は笑った。こっちに来いと草むらに連れていかれ押し倒された。真上にぎらぎら輝く太陽があった。暴れる右手に男は握り飯を掴ませた。飢えが恐怖を黙らせた。唾を飲み込む間もなく足の間に痛みが走った。苦しくて声も出せない。汗だくの男が何度も身体を押しつけてきた。手の中の握り飯に細い指が食い込んでいく。どれほど時が経ったのだろう、既に男の姿はなくなり握り飯を持った手と反対の手に銭が握らされていた。お清は出来る。そんな噂が広まるのに時間はかからなかった。街道の茶屋で一服するかように男達がお清を引いた。恍惚の笑みを浮かべる男の下で小さな身体は必死に耐えた。我慢したら銭がもらえて飯が食べられる。それ自体がどんな行為かも解らぬままにお清は男達の求めるままに隠微な行為を一つ又一つ覚え込まされていった。

「あんたさえいなければ・・・あたいだって、くそ」

「だってなんだ？わしさえいなければそんなふうにはならなかったとでも言いたいのか？しかし、それはどうかな。」

お清が久平に食って掛かるにはそれなりの訳があった。両親が焼き殺されてから3年が過ぎ、夜鷹として男の扱いも慣れた頃だ。当時、ヤクザの弥之助という男が頻繁に通い詰めていた。ある夜、弥之助はお清の上で一度果てた後、疲れたと仰向けになった。村はずれのほったて小屋、破れた屋根の隙間から星が見えた。腕枕をしてやると弥之助お清を引き寄せた。

「考えれば不憫な女よ、おまえの親父が馬鹿正直過ぎたばかりにしなくてもいい苦労しょいこんで。お清、俺とどこか遠くで所帯でも」

その声はお清と恋仲になったと勘違いした男が見せる甘ったるい口調だった。

普段なら聞き流していた。しかし何か引がかかった。おかしい・・・。

「おっとさんは大罪を犯したから御上のお仕置きを受けたんじゃないの？」

「大罪っていやあ大罪だなあ、なにしろ芥子の華を育ててたわけだから、わかるか阿片の元だ」

アヘンを吸いながら交われば極楽と地獄を行ったり来たり出来る、そうお清に勧める客がいた。しかしアヘンだけは手を出すなと夜鷹仲間に忠告されていた。人を狂わせ廃人にする薬、一度その魅力に取りつかれた者は死ぬまで止められない毒。お清はずっと不思議でならなかった。あの温厚な父が何故そんな恐ろしい薬を栽培していたのだろう。押し黙るお清を見て弥之助は悲しそうに笑った。

「元吉は仕方なくやらされていただけさ。本当の黒幕は庄屋の九平よ。おまえの家は小作の中でも一番貧しかったからな、逆らえなかったんだろうさ。まあ久平にしたら小作なんて道ばたの草みてえなもんなんだろうが」

久平に命じられた元吉が村の北西にある谷奥の雑木林を開墾したのが始まりだった。熊の出そうな鬱蒼とした荒れ地は苦心の末、見事な畑に耕された。その報告を九平にすると元吉は袋に入った芥子の種を渡された。これは？と問い返すと不服でもあるのかと押し返された。九平に多額の借財がある元吉が断れないと承知のうえの無理難題、否応もなく元吉は密かに芥子の栽培を始めた。やがて花が咲き、実を結びぶとアヘンの精製の段階に入った。無論、元吉に精製の知識などあるわけもない。九平は人即家業とは名ばかり地元ヤクザと手を組み、弥之助のような駆け出しの手下達にアヘンを作らせ、その筋に売りさばいた。なにせ唐の書物を手本に素人が作ったアヘン、出来がいいようはずもない。粗悪品故に使った者が狂い死ぬこともあった。しかし、習うより慣れろ、芥子栽培も精製方法も年を追うごとに上達した。唐産とまではいわないまでも値段に見合う質のよいアヘンが作れるようになり、注文はうなぎ登りに増えていった。面白いように金は溜まったが九平は自分の身を守ることも忘れなかった。利益の半分を目こぼしをうけるために代官へ渡し、代官はその金を自らの出世の為、藩の家老へつけとどけた。趣味の刀剣にいくら金があっても足りないと思える家老が断るわけもない。猫とねずみが互いに毛繕いをするのだから九平は安心して商売が出来た。勢いに乗った久平は都に出て、もっと大きな華を咲かせようともくろんだ。しかしは、思わぬ事態が計画を狂わせた。家老に藩政を任せ、遊びほうけていた藩主が突如この世を去った。急きよ、元服から3年と経たない嫡男がその座につくこととなった。藩政で甘い汁を吸っていた近習らはたかをくくっていった。若い藩主などどうにでも丸め込める、誤算だった。腐り切った国の現状を苦々しく思っていた若き藩主はここぞとばかり、藩政改革に乗り出した。賄賂・汚職・不正と名のつくものは次々探索の手が伸びた。当然、代官はもちろん家老までもが慌てだした。全てが明るみに晒される前に阿片の一件を闇に葬らなくてはならない。一刻の猶予もなかった。家老に事を急ぐよう命じられ、代官と久平は阿片にまつわる一切の罪を元吉とその妻に背負わせ、始末した。

「あの夜、俺も親分につれられ芥子畑にいたのさ。松明を掲げ道具小屋の横で待つ

ているとおまえの親父と母親が提灯をぶら下げてやってきた。久平に急に呼び出されたんだらうよ、あの様子じゃ取る物もとりあえずといった感じだったなあ。」意外な形であきらかにされる真実、お清はじっとしてられず身体を起こした。

「忘れもしねえ、野犬どもが遠くで喧嘩をしていてな、遠吠え妙に気味悪くてよ」弥之助は昨日のことのようによく覚えている。あの日の両親に起きた一部始終はお清の胸を締め付けていく。

「”旦那様”って久平を呼ぶ元吉の着物をおまえの母親がしっかりと握ってた。すると、後ろに隠れていた代官が前に進み出た。手に持った鞭を振り上げ、元吉に向け振り下ろしたってわけだ。でな『百姓 元吉、そしてその妻トメ、兩名この様な所でおのが私腹を肥やさんと芥子の華を育て阿片をつくりし事、誠にふとどき千万、言語道断の大罪である。亡き先君はもとより藩政改革に邁進なされている若き藩主様政を汚すような振る舞い許し難し。よって、今この場において兩名に死罪を申しつけ、即刻あぶりの刑に処す。』だとよ、よくもまああんな白々しい台詞が吐けるものだと呆れたね。そういやあ一番の極悪人の久平は涼しい顔してたな」元吉夫婦を生け贄に差しだそうと筋書きを書いたのは庄屋の久平だった。代官の号令を合図に弥之助を含む組の手下達がぞろぞろと動き出した。危険を感じ、妻トメは久平に駆け寄った。年端もいかぬ娘を家にいる、持病があり残しては死ねないとするがりつた。しかし、久平は顔色一つ変えることなかった。弥之助達は抗う元吉とトメを引きずり、芥子畑に立てた丸太に縛り付けた。畑一面に油がまかれ、松明が投げ込まれた。燃えさかる炎の中で娘の名を呼ぶトメの声は弥之助の耳に残った。「やめて、もう聞きたくない。なんでそんな惨い事・・・」

涙を浮かべるお清を弥之助は抱き寄せた。

「悪くおもわんでくれ、やらなきやこっちが消されちゃったんだ」弥之助などどうでも良かった。ただ悲しくて、久平が憎くてお清は自分の身体をどうしてみようがなかった。一月経った頃、街道脇の草むらで弥之助の死体が見つかった。野犬に食い荒らされ太股や腕は既になく、かろうじて顔の判別が出来る程度酷い有様だった。死因は背中から合口で一突き、切っ先は心の臓を貫いていた。しかし、役人もヤクザの死を調べるほど暇ではなかった。腐乱した遺骸はゴミ溜めに埋められた。お清に秘密を話したと仲間に口を滑らせたのが事の発端、話はすぐに組長の耳に入った。口の軽い男は長生き出来ない、いわば当然の結末だった。しかし事はそれだけで済まなかった。あらぬ”うわさ”を言いふらされてはと久平は危ぶんだ。組長を使いお清を探した。しかし、お清の姿は街道から消えていた。行方を知る者も誰一人ない。結局、どこかで野垂れ死んだのだらうと探索は打ち切られた。それは今から7年前のこと、秋風の吹く頃の出来事だった。

「しかし、こうして再会できるとはなあ、喜ばしい限りだ。ところで一つ聞きたいことがあるのだがのう」

なれなれしく話しかけてくる無神経さにお清の片方の眉が上り上がった。

「なに、大したことではない。おまえを捕まえた辺りに確か鬼子母神が住むという

洞窟があったはず。まあそういうワシもこの目で見たことはないのだが。もしかしてそこに住み着いておったのか？」

神妙な口調で久平が訪ねるのには代々村人に受け継がれし言い伝えが関係していた。遠い昔、神とは名ばかりの鬼子母神という化け物が夜毎、村の子を食らい暴れ回っていた。しかし、通りかかった修験者により鎮められ、ほこらの奥に暮らしている。ようやく村は静けさを取り戻した。旅立とうとする修験者が言い残した言葉がある。決して洞窟には近寄ってはならぬ、もし、鬼子母神の眠り破りし者あらばの命なく、そればかりか子や孫にも災いは及ぶであろう。村人なら誰もが呪いのように覚え込まされていた。それ故、久平の命令でお清を探していたとはいえ、仁蔵と共の者達は森の奥へ足を踏み入れられる事ができなかった。

「知らないよ、そんなこと」

「そんなはずはない。なあ、その洞窟とやらはどこにある。ワシは迷信など信じぬ男で、う、まえまえから一度は見てみたいとおもっておったのじゃ。教えてくれぬか」

「しつこい、そんなに死にたいなら自分で捜したらいいだろ。あたいは止めないよ」行灯の中で油を吸い上げた芯がジリジリと微かな音をたてた。久平は少々不服そうに鼻を鳴らした。しかし、諦めたというふうでもない、ふふんと鼻を鳴らし、時間はたっぷりあるのだと話を変えた。

「よかろう、話を元に戻すとしよう。ワシはな、本心からおまえの無事を喜んでおるのじゃ。」

「冗談じゃないよ、どうせ弥之助のようにあたしも殺す気なんだろ。あんたの方こそ執念深い野郎だよ。まるで蛇みたいな男だね」

「そう突っかかるな、確かにあの頃は生きていてもらっては面倒だったのだ。あのおしゃべりが根も葉もない話をお前にしたものだから。こっちも困った事になりはせぬかと気に病んだわけだ。何せワシは根が臆病でな。許せ。だがそれもう昔の事でな、今更おまえが何を言おうとどうひっくり返るわけでもない。水に流せとはいわんがワシの中では終わった事だ。今はそんなくだらない話に何の興味もないでな。」

久平は漆のはげかかった長持に腰をかけお清を見下ろした。作りが良くないのか長持ちがミシミシときしんだ。

それを聞いたお清は悔しさをにじませ歯ぎしりをした。表情は野犬そのもの、手足を縛ってなければいまにも久平の喉を噛み切らんばかりの殺気に満ちていた。

「都合のいいことぬかすんじゃないよ。あたいは何ひとつ変わってなんかいない。あんたは鬼だ、いや薄汚い化け物さ」

それを聞いて久平は腹を抱えて笑った。なぜ笑えるのかお清には信じられない。

「お清よ、おまえは自分の姿を知ってそういつているのか？ほらここに鏡を持ってきてやった、じっくり確かめるがいい。但し、気をつけろ、目が腐るかもしれぬぞ」有無も言わず目の前に朱塗りの丸い手鏡が突き出された。向こう側から目をまん丸にした化け物がこちらを覗き込んでいた。だれだろう、おびたしい吹き出物を溜めたお清の顔。酷い事ぐらい解ってはいた、しかしこうまざまざ目の当たりにす

ると自分でさえ吐き気をもよおした。耐えきれず目を逸らそうとすると久平が髪を掴み鏡に押しつけた。

「わかったか、ええ、おまえが何者なのか？」

鏡の縁に吹き出物がこすれ、つぶれた膿が頬をつたい唇を濡らす。生臭い香りが鼻の周りに広がった。手を縛られているせいで膿をぬぐう事も出来ず、歯茎の周りに染みていくその苦さにお清は身もだえした。

「殺したいなら早く殺せ、こんなおもいをして生きているのはもう沢山、好きなようにすればいい。」

着物の袖で鼻と口を覆い怪訝な顔で久平は覗き込んで見せた。

「年頃の娘がこんな有様では人前にでられんはな。しかし、何故にこんな事になった。夜鷹の梅毒は目にしたことはあるがここまで酷ければ間違いなく生きてはおらんぞ。それに・・・病の様子もちいと違うようだが」

「どうせ死ぬんだ、話す必要ないだろ。それにあんたと一つ所で話している事さえ虫ずが走るんだよ。さあ殺せ」

身体を長持の壁に打ち付けふたたび音を立て暴れて見せた。

「そう慌てるな、よかろう話したくなければ無理にとはいわぬ。所詮、訳などどーでもよい。」

そろそろ本題に入ろうかと久平は唾を飲んだ。つきだした鋭角な喉仏が皮の内側で生き物のように暴れた。

「実はな、おまえに大切な頼みがあってここへ来てもらったのさ」

久平はお清を抱き起こし、目の前に座らせた。てっきりすぐ殺されると思っていたお清は意外な言葉に驚きを隠せなかった。久平は近くにあった空の酒樽を長持ちの脇に引き寄せどっかりと腰かけた。

「すでに知りおるかもしれんが村に奇病がひろがっておってな、幾人もの村人が病に犯され死んでおる。このままではこの村はおろか近隣にも広まるだろう。そうならば手の施しようがない。庄屋としてはなんとかして村を救いたいじゃ」

お清は口をつぐんだ。

「嘘だと言いたげだのう。しかし、おまえは既に病に犯された村の者を見ておる。いや手込めにされたと言うべきか？ほら覚えておろうが、おとついの夜、酷い目にあっただであらう」

はっとした。もしやあの男のことなのか？目を見開くお清に久平は頷いて見せた。

「災難じゃったのう。しかし、おかげで村の娘達はあの色魔から救われた。礼を言うぞ。」

あの夜、7年ぶりにお清は人里に下りていた。無性に人の話声が恋しく、足が坂を駆け下りていた。しかし、いざ村へ入ろうとすると急に恐ろしくなった。自分は何がしたいのだ。我に返り、村に背を向けた夜道を歩き始めた。突然、強い力で背後から押し倒された。相手は月を背にし、顔は見えない。ただ、組み伏せる腕力からして男なのは確かだった。ぜえぜえという激しい息づかいがお清首筋に吹き掛けられた。逃げようと必死にもがいてみせた、男はそうはさせじと馬乗りになった。獲物を手に入れた雄叫びなのか、月に刺さる奇声を今も耳が覚えていた。久平が具体的

にかたるほどに記憶は輪郭を際だっていく。そういえば重ねた男の肌は炎のように熱かった。更に言えば猿のようにまったく落ち着きがなく、目の前の男が本当に人かと疑ったほどだ。

「思い出したようだの。そう、その時の男が佐の助だ。彼奴のことならおまえもよう知っておろう」

村一番の色狂いとして知らぬ者はない。夜鷹をしていた頃、何度か相手をした覚えがある。しかし、お清の知る人となりとは微妙に何かが違う。記憶にある佐の助は女を抱く為なら齒の浮くような台詞や嘘を見事に言っただけはする、しかし、あの夜のように力づくでどうこうという男ではなかったはずだ。

「信じられぬのも無理はない、この病は聖人さえも狂わせるのだ。恐ろしいのう。しかしだ、命いくばくもなかったはずの佐の助がどういう訳か元気になった。はじめから病などなかったかの如くピンピンじゃ。だが医師も見放したこの病を治せる者はおらん。とすると神様仏様の御陰と言いたいところだが彼奴に限ってそれはありえん。どうにも合点がいかんでな。」

なかなか本題に入ろうとしない久平にお清はじりじりした。

「だからなに、弥之助の病とあたいに何の関わりがあるっていうのさ。あんたの言うことはまるで訳がわかんないよ」

「まてまて、それがな、おありなのだ」

先ほどの鏡をもう一度手に取りお清の前につきだした。顔をそむけようとするお清の顎を九平は握った。手の中でぶちりと吹き出物が音を立て潰れた。九平はしまったと顔をゆがめた。

「実はなこの腐った膿が奇病の薬になるかもしれぬのさ」

お清の膿は流行病に絶大な効能を持っているに違いない。九平は持論を話して聞かせた。

「その証拠に翌朝、弥之助の高熱は冷め、身体に力が戻ってきたというのだ」

「ばかばかしい、流行病って何の事。だいたいそんな嘘をつかなくたってもうあたいは捕まってるんだ。煮るなり焼くなり好きにしたらいいじゃないか」

精一杯の悪態をつき九平の顔に唾を吐きかけた。九平は動じなかった。袂から手ぬぐいを取り出し、ゆっくり拭くと疲れたようにため息を漏らした。

「里に暮らしておらぬからそんな悠長な事を言っておられるのだ。皆がどれほどこの病に苦しめられているか。もし、これが冗談ならわしもどんなに気が楽かしれん。それに考えても見ろ、嘘をついてわしに何の得がある？お前がとびきりの美人ならそんな気にもなるが……。まあいい、さっきも話したがもうお前を殺す気などない。それに今となっては生きていてもらわねば困る。不思議なものよ、運命かの」しみじみとお清の顔を眺めた。入り口から吹き込んだ風が蔵の上方にある明かり取りの小窓へ駆け上っていく。それにつられ蠟燭の炎がぶるぶると揺れ、壁に並んだ2人の影も同じように揺れた。

「そこでじゃ、この村を助けてもらえんか。つまりその膿を薬として流行病に苦しむ村人達に分け与えてやってほしいのだ」

風が止み、踊りを止めた行灯の明かりが久平の濁った瞳に写った。

「冗談じゃない、御免被るよ。あんたらなんか死んじまえばいいのさ。いい気味」  
間髪入れず即答した。あの夜を境にお清の知る村は豹変し、村人の多くが死んだ  
父と母を悪し様に貶しはじめた。

『元吉は死んで当然さ、彼奴は元々つきあいも悪くて気に入らなかったんだ。これ  
でせいせいしたよ』

いくら代官に逆らえぬとはいえ、ここまでするかと思えるほどお清に対する仕打ちは冷たかった。いまでも覚えている。道をすれ違っても視線を合わされることなく  
無視し続けたられた日々。

「いまさらずうずうしいんだよ」

ひもじさに耐えかね、畑から芋を盗むと野犬を叩くように棒で追いかけられた。軒  
先で雨宿りしていると目障りだと泥川となった道に突き飛ばす者。そんな奴らのた  
めになぜこの身を捧げねばならない。死ぬなら死んでしまえ、不幸なになるなら久平  
共々、地獄に落ちたらいい。お清の復讐心に小さな灯がともった。

「そういうな。損はさせぬ、好きなだけ飯を食わせてやるぞ。それに村から病が去  
りさえすれば高名な医者にも診せてやる。元通りになれるかもしれないか。  
それにおまえも23、4になったのではないか？化粧をし、簪を髪に挿し、よい着  
物を着てみたいと思うだろう」

甘い言葉に心が揺れなかったと言えば嘘になる。正直、逃避行にも疲れた。しかし  
久平の世話になるなど、ましてや村人を救う為のものなら到底受け入れられるわけ  
もない。

「ばかにするのもたいがいにしな。そんな話に乗るほどお目出度くできてないんだ。  
どうしても助かりたいなら、死んだあたいの腐り果てた身体でも喰うがいいさ。ウ  
ジ虫が湧くだろうからかえっておつかもしんないよ」

皮肉ったっぷりの物言いに久平は苦虫を嚙み、着物の裾を握りしめた。

「どうしてもか？」

「くどいね」

縛られているお清の方が晴れ晴れとしていた。実際、こんなに気持ちよくタンカを  
切ったことは後にも先にもない。言わせておけばと顔を真っ赤にする九平をもっと  
怒らせてやりたい。お清はカラカラと笑った。

明かり窓から斜めに差し込む夕日がお清のつま先近くまで躰り寄っていた。あれから  
既に5日が過ぎていた。座敷牢に幽閉されたお清は太い柵に頭をもたげ、思いあぐ  
ねていた。申し出を断った自分を九平は何故殺さない？強引に従わせたいなら、拷問  
でもなんでもしたらいい。静かすぎる久平にかえって不気味なものを感じた。苛立  
ちがお清をじっとさせておかない。内から湧き出すむずがゆさが肌を搔きむしらせ  
る。分厚い壁の向こう、あざ笑うように幾万ものカエルが暢気に鳴き合わせをはじ  
めた。耳障りなその声は鬱陶しいの一言に尽きた。おまけに今日一日で暑さが一気  
に増した。夏が盛りが近いのだろう、世話係の女中セツが蔵に入る以外、戸が閉め

切られているのもきつかった。吹き込む風もなく、どんより淀んだ気が真綿のように喉元にまとわりついた。首筋をつたう汗が潰れた出来物を濡らす。むずがゆさにボリボリ身体をかき続け、終いに赤身まで出した。いったい何時までこうしていなければならないのかと途方に暮れた。突然、カエルの声が波が引いていくようにさあーと消えていった。まもなく鍵の音とともに厚い外扉が開き、内扉の格子の網から夕日が流れ込んできた。ギリギリと扉を引き開ける音に続き、久平が光を背負い入ってきた。目を刺すまぶしさにお清はたまらず手をかざした。

「どうだ、ゆっくり骨休めはできたか？」

久平はお清を見るでもなく、土間部分を歩き回り、蔵の内部に雨漏りや漆喰の剥がないかと綻びを探すように見えた。しかし、それも一通り納得がいったのか、ようやく顔をお清に向け、一間於いた後、聴かぬ子供に困り果てた親の如く肩を落とした。

「その様子だと居心地が余りよいとはいえんようだろう。贅沢な事じゃ、セツには三食、米の飯を差し入れさせておるというのに、ろくに手もつけておらんらしいじゃないか。ばちあたりな、まったく世話のかかる女じゃ。それでも百姓の子か」ぼそり、つぶやくとカマスから葉タバコをつまみ、延ベキセルに摘めた。お清は一言も口を開かなかった。無視がどれだけ相手を不愉快にさせるか知っている。かといって九平も挑発に乗るほど愚かでもない。ならばまずはいっぷくと吊してある行灯の火にキセルをあてた。立ち上る煙はまっすぐ薄暗い天井へと昇っていく。キセルの先が蛍のように鮮やかな紅の輝きを放つ。一息ついくと久平はキセルを口から離した。

「まあ、一人でこんなところにいるのもつまらんのだろう。でな、今日はおまえになつかしい客をつれてきてやったぞ」

久平は後ろを振り返った。すると入り口から手代二人に両脇を抱えられた若い男が現れ、土間に投げ捨てられた。手首を前に、合掌でもするように縄で縛られ、力なくうづくまる姿。どこか見覚えのある横顔だった。お清は身をかがめ覗きこんだ。はっとした。まっていたとばかりに九平はキセルの胴を手のひらで叩いた。

「そうじゃ、おまえが兄のようにしとうておった次郎ぞ」

男はゆっくりとまぶたをあげた。黒目がお清の顔をとらえた。

「お清なのか？」

弱々しい声、しかし忘れもしない懐かしい声。ずっと逢いたいと焦がれていた幼なじみ次郎だ。お清の顔に笑みがこぼれた。何年ぶりだろう。最後に言葉を交わしたのは両親が殺される何年も前のこと。あの日、次郎は口減らしも兼ね城下の両替商へ丁稚奉公に出された。幼かったお清はただ泣いて見送らねばならなかった。もう一生、会えぬものと諦めていた。なのにどうしてここに。次郎の目が今の自分を見ている。咄嗟にお清は自分の顔を着物の裾で隠した。

「おまえもよう覚えておったのう、こんな化け物みみたいな顔はしておるがのう子供の頃、おまえの後ろを金魚の糞のようにくっついていた元吉のところの娘、お清じゃ。ほらお清、恥ずかしがっておらんでこっちへ来て次郎に顔をよう見せてやらんか」カタツムリのようにうづくまるお清を九平はけしかけた。

「お願い、みないで」

元吉とトメが殺されたと知らせに来てくれたのも次郎の母マサだった。マサは元吉の母の乳を借り育った乳兄弟。そんな縁もあり、普段から家族ぐるみの付き合いをしていた。一人っ子だったお清は次男で3つ年上の次郎を兄のように慕い、それはいつしか淡い初恋に変わっていた。しかし、当時、次郎がお清の気持ちに気がつくわけもない。少女の想いは別れと共に胸の奥底に封印された。

「お清、おまえの方こそ何故ここにいるんだ」

「にいやんこそなんで、奉公にいったはずでしょ」

伏し目がちに答えるお清に次郎が何かを言おうとした、そこへ久平が割り込んだ。

「聞いて驚くなよ、次郎はな御店の金大枚50両をくすねたのさ。まったく大それた事をしたものよ。村の恥、面汚しじゃ」

両手を支え棒になんとか自分の身体を支えていた次郎だった。しかし、久平の言葉に激し、お清と久平へ訴えかけた。

「違う、俺はそんなことはしていない。何かの間違いです。」

「間違いかどうかは御上が決めることだ。だいいち、おまえが金を盗んでいるところを番頭が見たというじゃないか。それはどう言い逃れするつもりだ。」

「だからそれは」

「しつこい、どういおうとお役人が十分御詮議されたうえでのお沙汰渡ではないか」  
恫喝に項垂れる次郎、お清の眉間に皺がよった。なぜかそれをみて九平の態度ががらりと変わった。右手を自分の胸にあて、息も出来ないくらい辛いと押し黙り、暫くすると目に涙を溜めた。嗚咽をこらえ、声を絞り出そうとする姿は悲痛そのもの。

「お清や、お前は知らんだろうが御法で20両盗めば即刻死罪、獄門と決められておるのう。この知らせを聞いたときはワシも悔しくてならなんだ。ゆくゆくは村の出世頭になってくれるはずと喜んでおったのじや。なのに、何故にこのような愚かな罪をしでかしたのかと嘆かずにはおられなかった。しかし、どうおもっても御法は御法。ならばあの代に逝く前、一目故郷を見せてやりたいとおもってのう。そこで日頃、お世話になっているお代官様に藩の御重役にとりなして頂いたのだ。どうせ死なねばならぬ命なら、その命、村の一大事の為、疫病払いの人柱としてお払い下げくださいとな。御上もそれならばと特別におみとめくださった。ありがたい事よ」

聞き捨てならない言葉にお清の顔が青くなった。

「なによその人柱って、この村はまだそんなことしてるの。」

お清の二親亡き後、次郎の母、マサは自分が家に引き取ろうと亭主に頼んだ。しかし庄屋から田畑を任せられている小作の身、結局は踏み切れなかった。それでも諦めきれないマサはせめてもの手助けをと、夜鷹に墮ちたお清の世話を影ながらやいた。半年後、そのマサを不幸が襲った。街道を行く早馬が突如暴れ、木陰でやすんでいたマサは跳した。その夜、マサは息を引き取った。亭主は落胆し、2月後あとを追うようにこの世を去った。家徳は次郎の兄、一郎が継ぐこととなった。一郎は臆病でこすっからい男だった。当然、お清の世話などするわけもない。村人同様、道で会っても汚い物を見るような目で通り過ぎた。

「しかし、おまえの兄も冷たいのう。一応、事の次第を話さねばと思うてワシの方から出向いたのじゃ、ごねるかと思えば「庄屋様に煮るなり焼くなりお任せします」2つ返事です承したぞ。兄弟ならもう少し言いようがあろうになあ。あれでは他人より悪い、結局、我が身が一番かわいいという事じゃろうな。次郎、そう言う意味ではおまえも不憫よ。まあ、これが運命とあきらめ人柱として立派に村を救ってくれ。たのんだぞ」

遅れ遅れになっていた神社境内の御柱建立、おかげでようやく日取りが決まったと久平は胸に手を当てた。疫病も蔓延していることもあり、今回は古来の習わしを復活させ、次郎を生きのまま御柱の下に埋める。村を救って下さるよう祈願するのだと久平は神妙な顔をした。お清は子供の頃、母親に聞いたことがあった。遠い昔、村は長らく続く日照りに苦しんでいた。このままでは家畜はおろか村そのものが全滅する。何度となく寄り合いが持たれ、雨乞いの儀式を執り行うこととなった。神への貢ぎ物として、嫁入り前の娘が干上がった神社脇の池の底に埋められた。すると間もなく雨が降り、その年は豊作になったという。母に聞かされた昔話は幼いお清には恐ろしすぎた。その娘はどんな気持ちで土をかぶったのだろう。生き埋めなんてどんなに苦しかっただろう。土の下でどんなに怖く寂しかったろう。考えれば考えるほど切なくて、夜更けまで眠られなかった覚えがある。しかし、昔話は単なる過去の逸話と埃をかぶることなく、現実として村にいきづいていた。

「そんな惨い事はもうやめて。にいやんが他人様のお金を盗むような事するわけない。それにいやんほど優しくて真面目な人この村に他にいない事ぐらいあんただって知ってるでしょ。」

幼いとき感じた恐怖が一瞬にして蘇った。お清は牢の木枠に両手をかけ隙間に顔を押し込み体を乗り出した。

「ほほう、やけに肩入れするじゃないか」

右手で自分の顎をなでる久平の口元が緩んだ。

「それほど言うなら助けてやらぬ事もないぞ？」

「本当ですか？庄屋さん」

お清より先に次郎が反応した。うつぶせのまま顔ひねり久平に向けた。悲壮感しかなかった表情に、もしやという期待がにじみ出る。しかし、九平は顔を振りかえると眉間に皺を寄せ、右手の指先を次郎に伸ばそうとして止めた。

「いや、やはり無理だ、忘れてくれ。考えても見ろ、死罪にするところを人柱にするからというて無理に譲り受けたのじゃ。そんなことをしたらワシがお咎めをくらうでな。無理無理無理じゃ」

悔しそうに首を振る九平の顔にはそれでもまだ助けたいという迷いが見て取れた。次郎は一途の期待を持ったのは言うまでもない。

「俺はどうしたら？庄屋さん、教えて下さい。なんでもしますから。どうか助けてください。まだ死にたくはないんです。」

「そういわれてものう。なあお清、お前は どう思う。村を救うにはそれしかあるまい？」

いやらしい久平の流し目がお清をなめる。何が言いたいかは聞かなくてもわかる。木杵を握る細い指がわなわたと震えた。二人の様子を見て次郎も何かあると悟り、自分に都合のいい期待だけを一人歩きさせはじめた。

「なあお清、お前何か知っているなら教えてくれ」

次郎の差し出す両手の先にお清がいた。咄嗟にお清は牢の木杵から身体を離れた。二人の反応を楽しむように、久平はしばらく眺めていた。日も暮れ、今まさに沈んとする紅色の光が男と女の言い争いを蔵の壁に映し出した。それはまるで血の池地獄でもがいているように見えた。間もなくして日は沈み、行灯のみが頼りの闇が辺りを包んだ。もういいだろう、久平はさらりと残酷な宣告をした。

「すまんがのう。先ほど村の寄り合いで御柱の建立は一週間後と決まった。それまでお清と二人仲良く、残り少ないこの世を楽しめ。積もる話もあるぞな。」

久平は蔵の外に聞こえるようにパンパンと手を叩いた。外で待っていた仁蔵が蔵に入ってきた。手には小刀が一つ、次郎は後ずさりするが久平が行く手を阻む。恐ろしさに目を閉じた次郎を仁蔵は抱き起こし、手首を縛っていた麻縄をブツリと切った。助かったと一瞬勘違いし久平に手を合わせた。

「ばかもの」

仁蔵は座敷牢の鍵を開け、有無も言わず次郎を中へ蹴り込んだ。勢いよく転がる身体はお清が盾となり止まった。そこで初めてまじまじと二人は目を合わせた。気まずさにそれぞれが牢の端と端へと後ずさる。久平は右手に握っていたキセルの先で牢の木杵を端から叩きながら歩いた。カラカラと乾いた大きな音が分厚い壁で囲まれた蔵に響く。すり歩く草履の音がお清の前でとまった。久平は牢に顔を近づけ、口元に手を添え、お清だけに聞こえるように囁いた。

「生かすも殺すもおまえ次第、すきにせえ」

そう言い残すと仁蔵を従え蔵の外へと消えた。すぐさま扉は閉められ陰気な場所へと逆戻りした。止まっていた時が再び動き出したように、遠くにいたカエルの鳴き声が返す波となって打ち寄せた。お清は胸を押さえうずくまった。ざわめきが止まらない。

どれくらい二人はそうしていただろう。気づくと地面を叩く雨音が微かに蔵の中にまで響いていた。暫くして女中のセツがやってきた。消えかかった行灯に油を足し、開けた扉はそのままに出て行った。暫くして、ペタペタ草履をならしセツが戻ってきた。手にはおぼんに乗せられた木の器が3つ、どれもみるからに温そうな湯気を上げていた。

「お待たせしました。今日は少し自信があるんです。お清さん、よかったら食べてみてもらえませんか？」

格子の隙間から木のお椀二つと皿一つが、牢の中へ差し入れられた。こんもり盛られた艶々の白飯のお椀、みりんと砂糖で煮付けられた飴色のゼンマイに燻され香ばしい香りを放ついぶりがっこが乗った皿、最後の汁碗にはトロリ旨そうな里芋、すがきゴボウ、ぷりぷりした鶏肉が浮いていた。米の甘い香りが鼻をくすぐる。次郎

の腹がグウと鳴った。それでも二人は口を閉ざしたままだった。今度はお清の腹がぎゅるると長鳴きの鳥のように景気よい音を響かせた。

「まけた」

次郎がクスリと笑った。

「悔しいけれど腹は減るな」

「うん」

久平の言うとおりの五日というもの水以外は口にしていない。一人で蔵にいと、何かを食べたいという気力も起きない。なのに次郎が笑ってただけで身体が軽くなり、眠っていた空腹感が目を覚ました。お清は顔を赤らめ鳴りやまない腹を押さえた。

「ごめんね」

泣きそうな声で下を向くお清に次郎は声をかけた。

「いいから、飯をくをおう」

次郎が米の椀を手に取り、差し出すとお清は手を見られるのが恥ずかしくて膝の脇に隠した。椀を真ん中にしてにらめっこが続いた。ついにしびれを切らした次郎がお清の手を取った。温かい手、まともに次郎を見れなかった。

「冷めるぞ、美味しいうちにいただく。なあ、俺だけ食べるわけにいかないだろ」次郎は椀に口を付けた。たくあんを噛むボリボリという音が気持ちいい。お清も箸を握り、米粒を口に運む。自然と涙がこぼれた。止めようと瞬きすればするほど溢れ出した。おかしい、何か変、張りつめていた気持ちが解けていく。鼻水が流れ、袖でぬぐった。次郎がこっちを見て笑い、困った顔をした。それをみたら我慢できず椀を持ったまま大声で泣いた。口の脇から米粒がぼろぼろこぼれ落ちていった。

「まったく、昔とちっともかわってねえなあ。でもほっとしたよ」

次郎はお清を引き寄せ、胸にしまった。男のには細い指が髪の毛をなでた。次郎の臭いがした。懐かしさに顔を押し当てると次郎はそれを許してくれた。幼い日の記憶がよみがえった。祭りの帰り道、もう少し一緒にいたいとわざと転んで見せた。痛い嘘泣きをし、次郎の首に腕を回した。それが初恋だと幼いお清に解るはずもない。次郎は膝に手を当てさすってくれた。もう良いか？手を止めようとするお清は更に大きな声で泣いた。いけない事だと解っていてもこうしていれば次郎を独り占めにできる。そんな昔が懐かしく思えた。泣き疲れたお清はいつしか次郎の膝で寝てしまった。目を覚ましたのは明かり窓から見える空が白み始めた頃だった。次郎はお清を膝に乗せたまま壁により掛かっていた。ぼんやり、遠くを見る瞳には行灯の明かりがちらちら揺れていた。

「起きたか」

「重かったでしょ。ごめんなさい。ねえ、もしかしてずっと起きていたの？」  
体を起こそうとするお清の肩に次郎は手を置いて心配そうにたずねた。

「おまえ、相当うなされておったぞ。」

「ごめなさい」

「それはいいが、おばさんの名前を叫んで涙まで流してたからな」  
独りになってこの方、眠りこける客の顔を見る事はあっても他人に寝姿を見られた

事はなかった。たまらず目を伏せた。

「知っての通り、俺は村を離れて今日まで一度も帰らなかった。お袋が死んだ時でさえずっとあとになって手紙で知ったようなものだ。だから村のこともおまえに何があったのかもわからん。本当を言うと不思議でならぬ事ばかりでな、よかったら訳を聞かせてくれ」

次郎の父は奉公にでていた息子に心配を掛けまいと妻の死を知らせなかった。全ては息子に一人前になってもらいたい。その一心で死の床で妻が言い残した言葉を守った。

「そうだよね・・・、いろんな事があったは。でもありすぎるくらいあって何を話していいかもわからない」

どこまで話すべきなのか、聞いてもらいたい気持ちは山ほどあった。けれどそれは自らの転落をもさらけ出すことになる。

「知らない方がいいよ、がっかりするから。それにさっきあたいのこと変わってないっていったけど変わったよ。もうにいやんの知ってるあたいじゃないの」

「みんなガキのままでいられねえんだ、生きるには仕方ねえさ。そういう俺だって狡猾辛くまとまっちゃった。気にするな、どうあってもお清はお清だ。」

慰めはかえってお清をかたくなにさせた。

「ありがとうね、でも、そんな生やさしいものじゃないの」

「わかったから」

「わかりっこない。簡単にいわないで」

溜まった涙がぼとり床へ滴るようにお清は想いを吐き捨てた。予期せぬ言葉に次郎は胸ぐらをつかまれ、息がとまった。

「そんなつもりじゃなかった、すまん」

「何で謝るの、にいやんは悪くないでしょ。」

「しかし、気に障るような」

「いったでしょ、変わったって。どんなに優しくされてもひねくれた物言いしかできないの。あたいは言葉を知らない。覚えた言葉は汚いものばかりなのよ。だから」村に裏切られ、男達にもてあそばれた日々がお清に本音で語る危うさを身に染みさせていた。それ故、嘘と虚勢で自分を守る術が知らず知らずに身につけてしまった。

「やめたくても自分じゃどうしようもないの。かわいげのない女なの。」

「俺がそれでもいいと言ってもだめか？」

本当は、そう言ってくれる誰かをずっと探し求めていた。もう強がりもここまでとお清は観念した。

「好きにして、嫌いになってくれていいよ、それなら話せるから」

「わかった」

その言葉をどう解釈すればいいのかは解らない。しかし自分の問い掛けが矛盾に満ちているのも承知している。迷っている間もなく、決心より先に心の隙間から言葉がこぼれてしまった。

「目を覚ますとおとつあんもおっかさんも家にはいなかったの」

ぼつりぼつりと語られる事柄が次郎の胸を締め付けた。突然、両親の死を知らされ

無惨な骸と対面した幼いお清の驚き、行き場なく生きるために夜鷹になるしかなかった苦悩、両親の死の真相を客から聞かされた時の憎悪、秘密を知ったお清を葬ろうとする追っ手の恐怖、すべては庄屋のせいだとお清は目を赤くした。話が本当ならあの泣き虫がよくぞ独りで生き抜いてきたものだ、次郎は驚かすにはいられなかった。

「このうえ、また庄屋はあたいを苦しめようとしているの。でも、もう振り回されるのは沢山」

月日が経ち忌まわしい記憶が風化しかかった頃、ひっそり隠れ住んでいたお清は山奥から村に引きずり出された。何の因果か、我が身の膿が蔓延する病を唯一治せる特効薬だと庄屋はいった。もちろん手を貸す気はさらさらしない。しかし抗っても受け入れらず、ここに何日も牢に閉じ込められていると訴えた。

「あいつは鬼よ、金のためなら誰かを陥れることなんて苦じゃないの。なんで久平が流行病で死なないのかっておもう。きっと神様は金持ちを特別扱いするのよ」次郎はただ黙って聞き、時折、小さくうなずき唇を噛んだ。

「よくがんばったなあ」

胸に言葉が染みた。ようやく言えた。解ってもらえた。それで十分だった。

「死ぬいくじがなかったのよ。おかしいでしょ。」

蔵の外で降っていた雨が次第に強くなっていく。瓦を打つ激しい雨音が蔵を包み外と内を完全に切り離れた。

「おっかあさんの所へ行きたいと何度も思ったよ。でもおばさん（マサ）があたいに言ったの。『自分で命を絶った者は天国には行けず地獄におちるしかないの』って。だから死んではだめ、いつかきっと良い事があるからって。ねえ、にいやん、あたい学問も習い事もしたことがないから解らないんだ。ほんとうにそんな天国や地獄なんてものがあるの？地獄ってところは今のあたいの暮らしよりおっかない所なの？ねえ、おしえて。もし、今より楽ならあたい地獄に行くよ」

次郎は顔を上げた。母マサの言葉をお清から聞くとは思ってもしなかったからだ。

「お袋がそんなこといったか。・・・そうだな、おばさん達は極楽浄土にいるのにお清が地獄なんかいったら悲しむものな。確かにそうだ。いいか、地獄はものすごくおっかねえんだ。あんなところへいっちゃなんねえ。生きてなきゃ嘘だ。死んだらだめだ」

「でも・・・切ないばかりで生きて良い事なんてちっともなかったよ。なのにおばさんばかり先に逝っちゃってさ。」

マサが早馬に蹴られた夜、お清は破れた戸の隙間から家の中を覗いていた。医者が亭主と兄の一郎に首を振った、今でもはっきりと覚えている。どんなでもいから生きろと勇気づけてくれたマサが先に逝った。

「ずるいよ、おばさん」

次郎はお清の頭に手を置いた。艶のない縮れた髪、耳は全体に赤く腫れ上がり、痒みにかきむしる首元は目を背けたくなるほど皮膚が捲れ痛々しい。

「大人になれば直ると思ってたけどかえって子供の頃よりずっと酷いな、痛いだろ」生まれながらにお清は皮膚に病をもっていた。オムツかぶれが酷く冬以外は薄い襦

袴一枚、裸もおなじのような格好での生活。いつも身体のあちこちを搔くお清を覚えている。汗をかく夏は特に酷く、身もだえしていた。父の元吉は娘を不憫に思い、良い薬草があると聞くと多少値が張っても買って飲ませた。妻トメも異論はなかった。このままで嫁にも行けない。だが余分な金などあるはずもない。秋に刈り取るはずの米を担保に久平から金を借り、娘の薬代に充てた。それはいつしか担保の額を越えた。ただでさえ小作として久平に頭の上がらぬ身分、それが借金までしているともなれば久平の無理難題を断れぬのは当然と次郎は納得した。

「汚らしいでしょ。あたい女になんか見えないよね」

髪をなでる次郎の手がぴたりと止まった。

「いいの、本当だもの。このまえ鏡を見せられても自分だって信じられなかった。久平のいうとおり、ほんと化け物だわ」

お清は次郎の手をそっと自分の頭から下ろし、もう十分甘えたと身なりを整えた。

「この身体は毒の捨て場、あたいを買った客がどんな病気を持っていても嫌だなんて言えなかったの。」

拒めば殴られるのがオチだった。殴られるくらいならまだいい、お高くとまっているなんぞと噂が広まれば客足はたちまち遠のいていく。つまりそれは死を意味した。

「梅毒にもなったは。ただでさえタダレた肌だっていうのに体中赤い斑点だらけ、みっともなくして暫く客も取れなくてね。やっと直ったと思っても次から次へと得体の知れない病に追いかけて、ほんとうに困ったは」

穏やかに話して見せてはいるが誰も寄せ付けぬ冷たさが漂っていた。次郎は言葉を挟む事はおろか頷く事さえも出来ず、ただお清が舐めた水の苦さを想像するしかなかった。夏の夜の突然の雨は蔵の外で更に激しさを増し、ごうごうと吹く横風が雨を蔵の中に押し込んでくる。吊してある行灯がゆらゆら揺れた。二人の影が壁に踊る。お清がまだ告白し切れていない秘密を我慢しているように見えた。誰にも打ち明けられぬ事、だからこそ今吐き出してしまわなければ。お清は両手を胸に当てた。

「洞窟に住む鬼の話し、にいやんも知ってるでしょ。」

「村のもんでしらねえやつはいねえだろ、恐ろしい話を散々親から聞かされたからな。」

鬼子母神が住むという禁断の洞窟、鬼子母神、またの名をカリテイモ呼ばれた夜叉神の娘は嫁いだ先で沢山の子を産んだ。にもかかわらず、気性の荒さ故、近隣の幼子をさらってはとって食うという悪行を繰り返していた。村人は何時、我が子も餌食になるのかと恐れ、気が気ではなかった。そこへ難儀を聞きつけた旅の修験者が現れた。彼はカリテイモが洞窟を不在にしている隙に彼女の子を隠した。嘆き悲しんだカリテイモは自分の過ちを悟った。そして洞窟の奥に籠もり、自らが奪った幼き命を供養するため経を読み、懺悔の日々を送り始めた。

村を去ろうとする修験者は村人達にきつく念を押した。鬼子母神の祈りを邪魔をしてはならない。もし、彼女の平穏を乱す者あらわれれば、再び残虐な魔物に元に戻らぬとも限らない。そうなるはもう手の施しようがなく、再び災いをもたらされ、村は没落するであろう。迷信や伝説が息をしていた時代、言い伝えは子から孫へと受け継がれていた。

「あたい、九平に村を追われてその洞窟に逃げ込んで暮らしてたの」  
予期せぬ言葉に次郎は口を開けたまま言葉を失った。

「驚いた？そうよね、でもあれは迷信なのよ」

「鬼はいなかったてことか？」

「ええ、住んでいたのは鬼じゃなくてね、関ヶ原の戦いで敗れ落ち延びた豊臣の残党とその家族、病気にかかって弱っていたは。」

険しく奥深い山懐の地形、それを格好の隠れ蓑に住み着いた残党は追っ手を恐れ、山里の村人達とはの交わりを持つとはしなかった。時は止まり、結果、近親交配が進んだ。やがて産まれる子供の多くに異常が見られるようになった。死産も多く、そこで暮らす人の数は年を追う事に減っていった。敗走から40年前、恐ろしい病気が彼らを苦しめ始めた。業病だった。

「関節のあちこちに大きなコブが出来て破けるの。それに顔の右と左で別々に崩れて眉毛もなくなったり手足が曲がって身体がうまく動かなくなったりとか」

鬼子母神伝説がどのような経緯で作られたかは解らない。考えられるとすれば道に迷い、入山した村人が業病にかかった女を目撃した。たまたま、その女が子供を抱いていたのかもしれない。世にも醜い女が赤ん坊をあやす光景は理解されず、いつしか鬼女が子供をさらったという話に尾ひれがついた。そこら辺が一番考え得る答えだろうと残党の長はお清に話してくれた。

「うれしかったあ」

小窓を眺めるお清の瞳に行灯の灯りが映る。日々を懐かしむ横顔は穏やかに見えた。

「うれしかった？」

九平から逃げ延びる為とはいえ、業病の者達と一緒に暮らすなど、次郎には考えられなかった。何故、お清はこうも満ち足りた表情を見せるのか不思議でならない。

「だって、あたいより不幸な人間がこの世にいたのよ。そうね、にいやんにはわからないよね」

声は確かに明るく次郎の耳に響いた。

「子供の頃からずっと神様を恨んで生きてきた。なんであたいばかりこんなただれた肌で生きなくちゃならないのって。だから、まわりの娘たちが羨ましく、妬ましくて、憎くみもした。なのに、あたいより醜い姿で苦しみ生きている人がいたの。だから、その時、初めて神様にありがとうって言えたは。天にも昇る気持ちってこの事をいうんだって」

残酷な言いようだった。けれど偽らざる気持ちなのだろう。ただ、そうはおもって複雑すぎてああそうかとは返せなかった。次郎が自分の言葉を快く受け取れないのは百も承知していた。それでもお清はやめなかった。

「あたい、逃げられないようにずっと見張られていた。秘密が漏れるのが怖いからって返してもらえなかったの。でも、逃げるつもりなんてこれっぽっちもなかった。だって弱っていくあの人達のお世話頼まれたのよ。あたいがいないと食事も出来なければ厠にもいけない、ひどい人なんか寝返りだって出来ないの。」

自分が必要とされている事が嬉しくてたまらないという意味以上の優越感が言葉の隅々で笑い声をあげていた。散々見下され生きてきたお清が今度は人を見下す快感

に酔っている。

「暮らし始めてから6年目、あたいもとうとう同じ病にかかったの。」

「え？」

「そんな驚く事ないじゃない、一日中世話してたんだから当然よ。いつかそうなる  
と覚悟はしていたし、正直、遅いくらいよ。」

言葉に深刻さはない、それどころか業病になることを期待していた様子さえあった。  
傲慢な優越感が自虐という歪な快感へかたちを変え、堕ちていくことが我が身の  
幸せとでも言っているようだ。お清は次郎を試すように自分との距離を隔たりを更  
に広げてみせる。何とか引き戻そうと次郎は綱を引いた。

「までよ、でもそれは変だろ、おかしくはないか」

「なぜよ、嘘なんてついてないもの」

「そうはいっていないけど、話が本当なら、どうしてここにこうしてられる？  
その業病ってやつにかかると起きてははいれんのだろ？死んじゃうんじゃないのか」  
次郎は腰を引き気味にまじまじとお清の顔を眺めた。

「吹き出物に膿だまりはあってもコブは見当たらん、それに手足もまともじゃない  
か。よくはわからんがというような病には見えないがなあ」

素人はこれだから困る、そうといたげにお清はため息をついた。

「堯病といっても直ぐにどうのこうのっていうような病じゃないの。何年もかかけ  
てゆっくり真綿で首を絞められるように弱っていき、醜い姿に変わり果てた頃、  
どうにも動けなくなって命尽きるの」

「じゃあ、やはり業病なのか？」

「そうね、だったらよかったのにね、ほんとそう」

悔しそうに爪を噛む仕草が次郎には理解できない。

「どういう事だ？違うのか？」

繰り返される無神経な問いに思わず声を荒げてしまう。しかし次郎が納得出来ない  
のも無理はなかった。話しているお清さえ明快な答えを持っていなかった。

「わかんないのよ」

当時、業病はまだ直す手だてのない病、一度発症すると人里離れた谷の奥に追いや  
られ暮らすほかなく、以後の彼らがどのような生活を送り死んでいくのか知る者は  
なかった。それだけに信憑性に裏打ちされたお清の言葉には我が身に起きた自体が  
いかに特異なものであったか次郎を驚かせるにたる十分の説得力があった。

「体中コブだらけ、眉毛は抜け、目も見えず身体を触られてもわからない。つまり  
は息をしてるだけの肉の塊。でもおかしいのよ。そんなふうになるのには幾月もか  
かるはずなのにあたいはたった8日しかかからなかった。長もあたいもなんでこん  
なに急にと別の病を疑ったは。でも、どうみても症状は末期の病人そのもの、疑い  
ようがなかったは。でね、9日目の夜。もうダメだろうって長達が話してるのが聞  
こえたの。ああ、やっとこれで死ぬるっておもった。なのに神様はあたいを裏切っ  
た。いえ、もてあそんだのよ」

10日目の朝、様子確かめに来た長は腰を抜かした。というのも死んでいるであろうのお清が身体を起こし、『これってどういう事？なんであたいは死ねないの』とコブの消えた手を出し訴えたからだ。その言葉どおり、瞬く間に身体から業病は剥がれ落ち、コブだけでなく視力や皮膚感覚も元通りに回復した。しかし、そのかわり子供の頃から抱えていたタダレ肌が復活し、さらに次郎が今、目にしているような膿を貯めた出来物が肌の奥から数え切れぬほど湧き出してきた。何がお清の身体の中で起きていたのか誰にも解らなかった。以来、二度とお清が業病になることはなかった。

「直ったからってうれしくもなんともなかった。だってそうでしょ、自分で命を断った者は天国へ行けないっていうから我慢していたのよ。なのに今度はあたいだけが死ねないのよ。おまけにこんな出来物まで・・・こんな不公平はないは」まもなくすると今度は長が死の床に付いた。彼も長らく業病に犯されていた。ただ、他と比べ病の進行がとてもしっかりだった為には騙しながら生きながらえてきたというだけだった。戸惑うお清に長は言った。

『いつかこうなる事はわかっていただろう？もう、私達のことはいいから、お清は行きたい所へ行っていいんだ。自由だよ』見捨てろと言われてもは出来なかった。第一、居場所はここしか無く、なによりまた独りになるのが怖かった。病み上がり身体でお清は長を含め男3人女2人を看病した。ただ、以前感じた優越感はどこかへ消えていた。反対に命の終わりを約束された彼らが妬ましかった。もう介護の喜びもなく、死にゆく五つの肉の塊を気分任せて世話をするだけ、苛立ちは言葉や態度を雑にさせた。それでも長は寝床にいてお清の手を取り心から礼を言った。何の為にこんな事をしているのだろう。自答しない日はなかった。二月後、女二人が相次いで息を引き取った。その一月半後、男一人が、その一月後、もう一人の女性もこの世を去った。それから二月後の朝、長はお清に片手で礼をきり、静かに旅だった。二度と動く事のない長の唇に手をあてた。洞窟から声が消えた。今となっては病人の息する音さえ懐かしい。泣くなんて希望がある人間のだから出来ることだと思った。長の亡骸を埋めた塚を手で叩き空を仰いだ。哀れむべき者は消えた。いや違う、今ここに、新たに生まれたのだ。しかし、それすら誰も気づきはしないだろう。永遠の黙殺は死より残酷だ、お清は神を呪った。まだ死んではいけないのか？そしてなぜ生き続けなければならないのか。

「おばさんがあたいを苦しめているの。余計な事さえ教えてくれなきゃこの場で舌をかみ切るよ。ねえ、やっぱりあたい地獄でもいいよ。だって天国って地獄の真上にあるんでしょ。おっかささんって呼んだら聞こえるよね。もうそれでいい。ほんと、疲れたよ」

声を震わせるお清の目を次郎は見れなかった。外を吹く風が蔵まるごともぎ取りそうながり声をあげ、厚い壁をふるわせたその夜、二人はそのまま折り重なるように眠りについた。

二日、三日、四日と2人は語り明かした。次郎は自分が何故、こんな目に追い込まれたのか悟った。つまりはお清の気を引くために与えられた餌なのだ。事の真相を知った今、ある疑念が浮かんだ。身に覚えのない罪をはじめとする全ては久平によって仕組まれた策略だった気がしてならない。でなければあんなにも早くお裁きが下るものだろうか？それに死罪を言い渡した罪人をいくら人柱にするからとはいえ、法を曲げ庄屋に払い下げるだろうか？お清の話からすると以前、アヘンの密売で気づいた代官との関係を利用し、九平は裏工作をしたのではないだろうか。しかし、疑念をぶつけたくてもあの日以来肝心の九平が姿を見せない。時は次郎をあざ笑うように駆け足で過ぎ、あっという間に一週間が経った。もう焦らずにはいられない、本当に生き埋めにされてしまう。お清に命乞いすべきなのだろう、頭で解っていても言葉に出来ない。しかし、そのお清も迷っていた。幼い頃から兄妹のように育ち、恋心を抱いた次郎を見殺しにしてもいいのか。2人は蔵に漂う塵を静かに眺めた。明かり窓から差し込む一筋の光は天女の羽衣の如く、その形を変えていった。たまたら次郎が口を開いた。

「いっそのこと互い首を切り合って死なないか？俺がお清を、お清が俺をなら自分で自分をということにはならんだろ。生きいなきやだめだなんて偉そうに言ったが生き埋めにされるくらいなら、今この場でお清の手に掛かった方がましだ。一人で苦しみながら死ぬのは怖くてしかたない。俺と一緒に・・・なあ、そうしないか」本心ではなかった。精一杯の賭だった。次郎は女中セツに水が飲みたい湯飲みを持ってこさせた。セツが蔵から出て行くと湯飲み床に打ち付けた。砕けた破片が鋭い刃となった。人間の肉くらい簡単に切れる。一番鋭利な物を選び俯くお清に手渡した。欠片を手にお清がとうとう口を開いた。

「にいやん、あたい嫌だよこんなの。」

「俺だって嫌だよ、でも仕方ないだろ。もうすぐ殺されることに変わらないんだ。ならいっそのこと楽にあの世へ、たのむ。」

お清にとって二人で過ごした数日は人生でもっとも心安らぐ日々だった。時に泣き、時に笑いながら話を聞いてくれた次郎を心から好きになった。淡い思い出だと胸にしまい込んでいた恋心が今、以前にも増して鮮やかな色を放ち好きだと叫んでいる。醜い自分にそんな資格はない、想いを押し込めようとすればするほど更に苦しくなる。もう止められない。

「おねがいがあるの」

「よしてくれ、俺に出来ることなんてもうなにもない」

「あるの、あの・・・あたいをお嫁さんにして」

恥ずかしそうに俯くお清。予想もしていなかった突然の申し出に次郎は口ごもった。その間が耐えられない、お清は赤くなった顔を手で覆った。

「旦那さんになってくれたらなんだから。殺させなんかさせない」

自然と次郎の目がお清におちた。ぼろぼろの着物を身にまといふけだらけの長い髪、袖から覗く手は無数の出来物におおわれ所々破れている。流れ出す膿の臭いは鼻の奥をつんと刺す。けっして嫌いなわけではない。愛しくも感じる。しかし妻に出来るかと問われても自信はない。

「ちょっとまで、夫婦になるといっても俺もおまえも明日をも解らぬ身、だいいちこんなところじゃ祝言さえあげられねえ」

お清は大きく頭を振り次郎の膝にすがりついた。

「いいの、あたいをもらってくれるって言ってくれさえすればそれでいい。祝言なんてあげなくてもにいやんが旦那様になんてくれたらいいの。そうすればもうあたい独りじゃなくなる。でしょ？」

着物の裾を強く握りしめるお清の手を振りほどくことなどあまりに酷で出来ない。

「ほう、仲むつまじい光景じゃのう」

視線をあげると蔵の外扉が開き、内扉の格子の隙間から九平がニヤニヤとこちらを眺めていた。一体、いつからそこにいたのかはわからない。しかし、口元の緩みからして、あらかた話は聞かれていたようだ。ここが攻め時とばかりに、久平は内戸をガラリ開け中へ踏み込んだ。気迫に押され、二人は後ずさりした。逃がすものかと久平は座敷牢の格子を驚づかみにした。見開かれた目、とって食わんばかりの口。今にも格子をへし折りそうな力の入った指。

「そうじゃお清、恨みを忘れて生きてみよ。おまえがワシの申し出に頷けば悪いようにはせん。それどころか」

流行病が村から去った暁に二人に一軒家を持たせてやると久平は言った。さらにお清を高名な蘭学医に見てもらい、肌の病も必ず治してやると胸を叩いた。その申し出はかたくなな心を打ち壊した。お清は久平の足元に膝立ちですり寄り、足首を掴んだ。

「証文書かいてよ、いまあんたが言った事全て天地神明に誓って間違いなくやりますってさ」

久平は今までに見せたこともない柔和な面持ちで膿だらけの小さな手をとった。

「疑っておるのか、困った奴じゃのう。考えてもみよ、もし明日の神事で次郎を人柱にせなんだら、ワシは村人ばかりか御上からもどんなお咎めを受けるかしれぬのだ。そんな危ない橋を渡ってまでこの男を助けたとなれば、証文など書かずとも十分な証になるではないか？」

それでもお清は納得せず、今この場で証文を書けと強く迫った。九平も仕舞いには根負けし、外に待たせていた仁蔵に紙と筆を持ってこさせた。巻紙の上を筆がはしる。お清の手が座敷牢から伸び、久平の足下に折り重なっていく紙を中へ引き寄せた。ただお清は字が読めない、何が書かれているも解らず、仕方なくそれを次郎に手渡した。御店に奉公してただけあって目は流れるように往復を繰り返した。しばらくして九平は証文を書き終え、次郎も一字一句落とすことなく読み上げた。

「お清、これならどこへ出しても間違いなく通用する証文だよ。」

そう力説しながらも別の意味で窮地へ追い込まれた我が身を次郎は悟った。もう、お清の申し出を受けるしかない。それ以外の選択は死のみ、力ない指先からはらりと証文が落ちた。こうなる前、次郎には情を通じた女が他にいた。御店で共に働いていた下女だ。既に夫婦になる約束もし、行く末は小さくてもいいから二人の店を持とうと決めていた。もう叶わぬ夢とわかってはいても女の面影がちらついた。

「これで二人は夫婦になれるわけだ。いやめでたいめでたい」

高らかに笑う久平の真向かい、宝物のように証文を抱えたお清がいた。これ以上ない満面の笑みで次郎にほほえんでいた。口元から覗く八重歯が妙にとがって見えたのは気のせいだろうか。次郎は畳に右手をつき肩を落とした。とにかく今は死なぬ事、そう自分に言い聞かせた。

少しでも暮らしやすいようにと九平は2人を蔵から屋敷の家の離れへ移した。もちろん逃亡を防ぐ見張りを立たせてのこと、風通しの悪い蔵とは比べ物にならぬほど離れは快適だった。三度の食事も正月かと思うほどの贅尽くし、こうも続くとかえって飽きが来るほどだ。風呂はいつも新しい湯がはられ、上がると洗い立ての絹の襦袢が用意されていた。袖に腕を通す時のなんとも心地よさ、正直、こんな生活も悪くない。お清は贅沢三昧の日々を満喫した。

「いや、お清、おまえは本当に生き仏さまじゃ」

襖の向こうで九平が手をすり喜びの声を上げる。全裸のお清は布団に俯し夢うつつに聞き流す。傍らでは女中セツがぷっくり膨れた背中の出来物の一つずつ針で潰し、膿を採取する。膿取りを始めて既に三月経っていた。はじめ、破けた出来物から放たれる強烈な悪臭にセツは何度も嘔吐した。しかし、近頃、鼻が麻痺したのかなんということはなくなった。おかげで淡々と作業をこなせるようになり、仕事も早くなった。集められた膿は口の細いガラス瓶に入れられ、仁蔵が母屋へ運んでいった。九平はそれを横目で見ながら口元を綻ばせた。お清はセツに背中をふいてもらいながら襖へうつろな目をむけた。

「でどうなの、そんなもんで少しは病人は元気になってるの？」

「それはもう、これさえ飲んでしまえば高熱も翌日には嘘のように消えるでな。だから言っただろう、ほんにお清は生き仏様よとな」

こうも誉めあげるのには訳がある。三日前の朝、九平の一人娘お絹がとうとう流行病にかかってしまった。息子をもたない九平には婿を迎えねばならない大切な一人娘、死なせずに済み胸をなで下ろした。ただ訳はそれだけではない。九平はお清の存在を村人達に伏せ、流行病唯一の特効薬と膿を高値で荒稼ぎしていた。亭主が助かるなら、娘、息子が救われるならとなけなしの蓄えが九平に払われた。貧乏小作と見下していた村人がこんな金を溜め込んでいたかと驚いた。地獄の沙汰もという諺があるが、やはり人の命は金次第と改めて実感した。

「そう、じゃあ流行病ももうすぐ消えてなくなるわね。待ち遠しいわ」

声は期待と充実感で満ちていた。いつも次郎が側にいて、甲斐甲斐しく世話をしてくれている。近頃は読み書きを教えてもらい、今では夜、次郎が読み聞かせる書物の文字も目で追えるようにもなった。お気に入り竹取物語、もう何度も読んでもらっているのに”またお願い”せがんでしまう。困った顔をする次郎を見るのがうれしくてしかたない。

「いや、まだたくさん病人はおるでなあ、もう一踏ん張りもふた踏ん張りもしてもらわねばならん。」

九平の話は嘘ではないが本当でもなかった。それには恐ろしいからくりがあった。

久平は仁蔵に命じ、特効薬を買えずに死んだ者達の亡骸を墓場から掘り起こし川に流させた。すでに腐りかけたそれは隣村の川岸に流れ着き異臭を放った。たまりかねた隣村の村人は川に押し流すか河原に埋める。するとたいていそのうちの数人が流行病に犯されてしまう。病人が増えれば特効薬が売れる。このままいったら金蔵をいくつ建てても追いつかない。結局、久平は始めから村人の事など考えてはいなかった。もう前のようにご禁制のアヘンで稼ぐような危ない橋を渡る必要はない。これからは特効薬をどうしようと売りさえすればいい。何せこちらにはお清という金のなる木がある。そう考えると顔が緩まぬはずはなかった。

「ご苦労だったな。風呂でも入って汗を流せ。そうそう明石の鯛が手に入ったでな、今夜、刺身にさせるから食べるがいい。油か乗って旨そうじゃぞ」

久平は襖に背を向け奥へ戻ろうとした。するとお清が右手を布団につき、けだるそうに身体を起こし薄紅色の襦袢に片袖を通した。

「ねえ、お勤めが済んだら長崎のお医者様に診せてくれるって約束よね、よいお医者様は見つかったのかい。」

足袋が踏みしめる廊下の板がミシリと音を立てた。一拍二拍、返事がない。しびれを切らしたお清が襖の端に手をかけようとしたその時、久平が言いにくそうに口を開いた。

「じつはな、お前の膿を携えて何度も長崎の高名なお医者様を当たってみたのだよ。しかし、お前の病は万人に一人という珍しいものらしくてのう、この国に直せる医者はおられなかった。」

打ち明ける声はどんよりと沈んでいた。お清よりも脇で後始末をしていたセツのほうが神妙な顔をした。

「まっておくれ、それじゃあ、やっぱりあたいは治らないのかい？そんなの困るよ」

「まて、そうはいっておらん、ただ」

「いいわ、気休めなんか。あんたはやっぱり嘘つきだ」

一気に取り乱すお清、セツはそれを必死になだめた。部屋の中のごたごたは襖を隔てた久平にも聞こえていた。しかし、開けて入るわけにもいかず頭をかいた。

「話を最後まで聞け、いま直す手立てをエゲレス人のお医者様が調べておる最中なのじゃ。」

話によれば、もう手立てはないと使いの者があきらめかけた頃、出島で一人のエゲレス人と知り合った。通訳を介してお清の病気の話をするとそのエゲレス人曰く。母国では世界中と交易をしている関係で風土病にかかったまま帰国する者が多い。そこで政府は国をあげ、未知の病を研究し治療する機関を設立した。だからこそ我々は臆することなく、未開の地に”新たな客”を求め海を渡る事が出来るのだと語ったという。

「でな、お前のような病を患ったご婦人の話も聞いたことがある。そう言うておられたそうだ。うれしかったのう、ワシは一筋の光をが射した思いがしたぞ。」

「だからって私がお前の異国に行ける訳じゃないでしょ。絵に描いた餅は絵に描いた餅でしかないじゃない」

「だからじゃ、そうならぬ為にお前の膿をそのエゲレス人に託した。」

「そんなことしてなんになるの。第一なんで今日までだまっていたのよ」

「まだ直せるとは確証が持ててはおらぬで。なのにお前に期待を持たせるのは酷だと思ったのさ。」

久平の言うには、エゲレス人は両親に会うために母国にしばらく帰国する予定になっていた。久平は使いに命じ、多額の金と膿の壺をエゲレス人に渡した。国に着いたら国家の医療機関で診断してもらう手はずになっていた。もし、エゲレス人が見事専門医を連れ帰ったなら更に多額の報酬を支払うと約束している。これでもかと久平は言葉をたした。襖の向こうでそれを聞くお清の肩から濡襟がすり落ちた。あらわになった乳房には以前と変わらぬ無数の吹き出物が膿を蓄えていた。一日も早く、この体を脱ぎ去りたい。そしてもっと次郎に愛してもらえる普通の女になりたい。

「いつその人は帰ってくるのよ。ねえいつ」

「行きに4月、帰りに5月、病が何かを調べるのに3月や4月はかかるだろう。

とするとどう急いでも一年はなあ」

「そんなに待てというの？。ねえもっと早くならないの」

感情むき出しに声を荒げ、終いには涙声もきこえてきた。

「巧妙は見えているというのになぜそう急ぐ。なに藤生ない暮らしをしさせておるだろう」

過ぎるほどの贅沢をしていることはお清も解っている。しかし次郎が優しくされればされる程、この身が恥ずかしくて申し訳ない。はやくまともな女として次郎と二人、正真正銘の夫婦としての普通の暮らしがしたい。朝目覚めるたび、今日か明日かと待ち望んでいる。それなのに、あと一年はかかると告げられ泣かずにいられなかった。久平にはたかが一年でしかないのかもしれない、しかしお清には1000年に値した。どうしようもないとは解っている。ただ、苛立ちをぶつける相手は他になかった。気持ちを察するようにセツの手がそっとお清の背中にふれた。

「ワシも難儀しておるのじゃ。・・・よしわかった。エゲレスに帰る次の船に手紙を託そうぞ。おまえが一日千秋の想いで待ちわびている。なにとぞお早めのお戻りを心より願うところでありますとな、それでよかろう？」

久平の声は困り果てていた。一通りわめき散らし、幾分気が晴れたお清はセツから手ぬぐいを受け取り涙を拭いた。

「ああ、もう堪忍してください。こんな事がお清さんに知れたら」

上に伸びる細い指を骨太の指が追いかける。小刻みに震えるくびれた腰が男の欲望をさらに駆り立てる。仰向けにさせられた女は身体の中を突き上げる快感にあらがおうと畳をかきむしった。障子の向こうの松が風に揺れ、獣が両手を広げていまにも襲いかかってくるようだ。男の胸から一筋の汗がつたい、重なり合う女の腹を濡らした。たまらず声をあげそうになる女、慌てた男は手ぬぐいを女に噛ませた。二つの体はうねる蛇のように妖しく絡みつき終わりを向かえた。疲れ果て女の胸に倒れ込む男、その男の頭に手をあて愛しそうになでる女、こんなに人を好きになった

ことはない。けれど許されるわけがない。女が迷っていることなど男はまったく気づかない。

「決めた。ここを出たら二人で上方にいこう。読み書きそろばんができれば誰か使ってくれるだろ。たとえだめでも駕籠かきでも何でもして稼ぐさ」

男の言葉に女の心が晴れる事はなかった。それどころか瞳は定まらず切なそうにため息を漏らした。意外な反応に男は落胆した。これほど逢瀬を重ねているのに女は俺をそれほどは想っていなかったのか？男の不満、女なら気づかないわけではない。

「そんな目でみないで」

「なら、なぜもっとうれしそうな顔をしない。」

「怖い、お清さんの気持ちを考えると私はなんてことをしているのかって、それに旦那様にしたらと思うと・・・」

「何かと思えばそんなことか」

障子越しの月明かりが汗だくの男を闇に浮かび上がらせた。希望に満ちた次郎の横顔だった。

「お清の勤めが終われば俺はもう罪人ではない。そうすれば晴れて自由の身、誰に憚ることもないんだ。そうだろ、それにな」

太い腕に引き寄せられたのは女中のセツだった。あれはお清達が離れに移り住み、4月を過ぎた夜だった。用をたしたくなった次郎は寢息を立てるお清を起さぬよう、そっと部屋を抜け出した。厠へから出て廊下を戻る途中、湯殿でお湯を使う音がした。もう釜の火は落としてあったはずだ。こんな夜更けに誰だろう。そっと戸を開け中を覗いた。隙間から目に入る光景に次郎は息をのんだ。そこには一糸まとわぬセツが残り湯で髪を洗っていた。蠟燭の火に照らし出されたその裸体は健康的な艶めかしさに満ちていた。肌を滑り落ちる湯はたわわな乳房を包み込み、でっぴり鏡餅のような尻へと流れつた。自然と次郎の手がセツの背中へと伸びた。不意のこと、セツが男の力にあらがえるわけもなかった。全てが終わった証湯殿の床に赤い模様となって広がった。我に返った次郎はわびた。”あまりにセツが美しかったから”怯えていた娘心は生まれて始めて言われた男の誉め言葉に浮き立った。もとよりセツも次郎を好いていた。だからといって何をどうしたいと思っていたわけではなかった。しかし、想いを寄せる男にそういわれた我が身が嬉しくてたまらない。頬を赤らめるセツを次郎は抱きしめ頭をなでた。”ずっと気になっていた”いくつもの甘い言葉で耳から首筋をなぞられ、身体の芯が溶けていった。唇を求められた時にはもうセツは心を許してしまっていた。それからだった。夜更けになると離れ奥の部屋で二人は密会を重ねた。時折、見廻り庭を行き来するので声も上げられない。第一、お清に気づかれてはならないと一緒にいられるのは半時もなかった。しかし、その限られた空間と時が二人を更に燃え上がらせてしまった。この前まで少女だったセツが見る見るうちに女へと変わっていった。髪を振り乱し、自から次郎を迎えにいくようにさえなった。時にそれは早馬が急な丘を駆け上るように激しく次郎を圧倒した。つぼみを開花させた自負心が次郎を更に大胆に、そして愚かにさせた。

「私だっけずっとうこうしていたい。でも貴方はお清さんのご亭主じゃありませんか」

「そんなもの形だけのこと。知ってるだろう。あの時、お清の夫にならねば今頃生きてはおれなんだ。お清が嫌いなわけではない、努力もしてみたさ。しかし心に嘘はつけぬ。考えても見る、あの汚らしい身体と毎夜添い寝する俺の辛さを。セツよセツ、お前が俺を虜にしたのだ。好いておるのはおまえ一人しかおらん。一緒にここから出よう。そして」

必死に訴える次郎の目を見てセツは嘘を突き通す事ができなくなった。この人は何も知らない。もう耐えられない。愛する人を偽り続けなくてはならないなら消えてしまいたい。そして苦悩する恋心が隠し通さねばならない秘密を言わせてしまった。「ここからなんて出れっこないの、あなた達は一生ここで暮らさなきゃならないのよ」

涙ながらに訴えるセツの話しを次郎は呆然と聞いた。九平は意図的に流行病が広め、苦しむ病人達にお清から採取した膿を高値で売りつけている。病はすでに隣村の住人達を蝕み、更なる広がりを見せようとしていた。

「お清をエゲレス医者に診せるという話はどうなんだ。村人達が元気になったら治療を受けられるんじゃないのか？」

「ご主人様は誰も長崎に人などやってなどはおりません。旦那様と仁蔵さんが話しているのを私、聞いてしまったんです。」

「全ては口からでまかせでしかないというのか...」

セツは沈黙で答えを返した。次郎の身体から力が抜けていく。なんと自分は愚かだったのだろう。こんな暮らしが永遠に続くならいっそ死んだ方がましだ。希望が落胆へ変わるとき、その振幅は何倍にも加速し、さらにそれは怒りとなって次郎を突き動かした。

「九平のやろう、馬鹿にしやがって。」

次郎はセツの髪に挿してあった簪を引き抜いた。あわてたセツは赤い襦袢を胸に当て次郎の腰に抱きついた。

「ねえ、なにをするの」

「決まってる、久平をメッタ刺しにしてやるのさ。あいつが死ねば何もかもカタが付く」

声を荒げる次郎を必死に引き留めた。突如、襖が開き数人の男達がなだれ込んできた。手には月明かりに鈍く光る合い口が握られていた。それを見て次郎の足が止まった。背後から物音がした。振り返ると障子が開き、男達が庭から上がり込んできた。

「おとなしくしておればいいものを、こんな小娘なんぞに熱を上げやがって、挙げ句の果てはワシを殺そうだと？お前は何様のつもりなんだ。」

男達を割って前に進み出たのは九平だった。もうだめだ、次郎の一物は見る影もなく小さく垂れ下がった。

「だ、だ、だましたのはおまえじゃないか。証文まで書いておいて信用させて」唇はふるえ恐怖に足に力が入らず、自分が果たして立っているのかも定かでなかった。それどころか吐く息は薄く、吸う息は胸に入っていない。握った簪さえ今にも落としてしまいそうだった。九平はニヤニヤしながら次郎を下からのぞき込んだ。

「はあ、ワシはおまえと約束したつもりなんぞこれっぽっちもないぞ。元はといえ  
ばおまえは死罪を言い渡された罪人ではないか。」

「だから俺はやってない」

「うるせえよ。盗んだ盗まないなんてワシにはどうでもいい。それに、セツとちち  
くりあうぐらいなら大目に見てやろうとも思ってはおった。たがワシに齒向かおう  
などというバカはほおってはおけんでな。」

結局の所、二人の逢瀬はとうの昔に九平の知るところだった。それを聞いたセツは  
九平に駆け寄り命乞いをした。男達は次郎を両脇から掴み、暴れる身体を畳に押し  
つけ、手ぬぐいを口に詰め込んだ。

「セツよおまえが余計な話しさえしなければこの男も死なずに済んだの。よいか、  
これはワシが殺すのではない。お前がこの男の寿命を縮めたのだ。恨むなら自分  
を恨め。遊びは終わりだ」

セツはちがうちがうと頭を振り、口を大きく開けたまま声にならぬ声で叫んだ。九  
平は邪魔だと足蹴にし睨み付けた。少しでも動こうものなら殴られる、恐怖に息も  
できない。そんなセツを尻目に九平は懐から三角に折りたたまれた赤い包みを取り  
出した。遠巻きに取り囲む男達は中味が何か知っているように見えた。わざとセツ  
の目の前で包みを開いてみせた。さらさらとした白砂糖のような粉、九平はそれを  
小指の先に少量押しつけ舌の先においた。

「うっ、ひどいなこれは」

いかにもまずそうに眉間に皺をよせ唾を吐いた。

「旦那様、なんですかそれは？」

久平は白い粉がのった包み紙を手に畳に片膝をつき、怯えるセツの鼻先に粉を近づ  
けた。

「これか？これはなあ 昔作ったアヘンじゃ。それも売り物にもならなかったとび  
きりの粗悪品でな」

そういうと不敵な笑みを浮かべながら次郎をふりかえった。

「この男は廁の帰り、突然心の臓の発作で死ぬのじゃ。なあ、セツ、生きとし生け  
るものは死と無縁ではいられぬだ。お経にもあるぞ、今日とも知らず明日とも知ら  
ず、遅れ先立つ人はもとより二つの眼閉じ夕べには白骨となりてとな。つまり、死  
はいつやってくるか誰にも解らんということだ。わかるか？セツ、わかるな」

後ろに控えていた仁蔵に包みを渡すとはだけた着物の裾をパンとひとはらいした。

「ただ、どうしてもこの男と一緒に三途の川を渡りたいというなら叶えてやる。ど  
うするセツ？」

そう言うのとセツの首に手をかけ力を入れた。必死にその手を払いのけようとするが  
息が出来ず気が遠くなる。セツの苦しむ顔を見ていると愉快で仕方ない。今さっき  
、少しだけ口にしたアヘンが久平を狂喜に駆り立てた。もう少し力を入れたら首の  
骨も折れるかもしれない。だがセツには死ねない事情があった。父は甲斐性なしの  
酒飲み、母も病弱で田畑も満足に耕すことができない。なのにセツの下に弟と妹が  
いた。こんな貧しい暮らしで何故三人も子供を作ったと母を恨んだ。嘆いてみたと  
ころで弟妹に罪はない。一家の暮らしはセツの稼ぎだけが頼りだった。それを承知

した上で久平はセツに問うたのだった。真っ青な唇でセツは言葉を吐いた。

「堪忍して・・・」

首を締め上げる手が外れ、セツは仰向けに倒れた。久平は咳き込むセツに跨りそのまま胸に腰を下ろした。尻の下で潰れる乳房は具合のいい座布団になった。セツの髪を掴むと首が折れそうなほどに引き寄せた。

「ならばこれからワシが言うことをよく聞け。」

部屋の真ん中にへたりこんでいるお清がいた。庭の松の枝に2羽の雀が羽を寄せ合っていた。差し込む日の光は哀れな女の影を畳にクッキリ写していた。空には雲もなく風もない、こんな日和をうららかと呼ぶのだろう。指が畳をなぞる。生まれて初めて覚えた文字。共に生きるはずだった愛しい男の名。しかし男は呆気なく逝ってしまった。未だに信じられない。はらはらと涙がこぼれ、膿だらけの手を濡らした。毎夜、子守歌のように聞いていた男が語る物語、もう何日も聞いていない。あれがないと眠れないのに・・・、これは嘘、全ては夢だと叫びたい。もう身体がバラバラになりそうだった。朦朧とした頭が悲鳴をあげていた。

「お願い、誰かあたいを殺して」

あの夜、セツの叫び声で目が覚めた。声のする方へ駆けつけると厠の前で次郎が胸を押さえもがき苦しんでいた。お清は慌てるばかりで為す術がない。騒ぎを聞きつけた久平が母屋から寝間着姿で飛んできた。すぐお清を次郎から引き離し、すぐさま医者が呼ばれた。しかし駆けつけたとき、既に事切れていた。医者はあくびをかみ殺し九平に死因を説明した。

「これは心の臓の発作ですな、いわゆるポックリ病というやつですよ」

ポックリ病は年に関係なく突然やってくる。寿命と思ってあきらめるしかない。医者はそうそうに帰って行った。こんな夜中に呼び出され迷惑だと顔に書いてあった。呆然とするお清の肩に久平は手を置いた。

「何でこんな事に、神も仏もないものか。お清、すまん、もっと早くにお前達を外へ出してやっておいたらこんな事にはならなんだ。きっと心労が重なったのだろう。次郎を殺したのは私だ。すまん、すまん」

もう、お清の耳には久平が何を言っていたのかも聞こえてはなかった。翌日、早速読経があげられ、惜しむまもなく亡骸は運ばれていった。棺桶を見送るお清の身体から魂が抜けた。あれほどここから出たいと思っていた焦りも消えた。久平は腫れ物に触れるように以前にも増し気遣ってくれた。もう庭に見張りもいなかった。代わりに子猫が預けられた。とても世話のかかる黒の雄だった。命に触れ少しでも悲しみを癒せたらという久平なりの思いやりだろう。しかし、いかんせん煮干しを与えるとき以外、黒猫はお清に寄ってこなかった。薄情な奴と笑うしかない。しばらく膿取りは休んではどうかと久平は言ってくれた。『でも、病人が待っているんだろう？』とお清が訪ねると申し訳なさそうにした。『いいよ、続けるから』と自ら着物を脱いだ。実際、何かしている方が余計なことを考えずに済んだ。平垣の上

でまた猫が喧嘩をはじめた。あまりにけたたましく鳴くので湯飲み茶碗を投げつけた。当たるわけもなく庭石に砕け散った。傍らにいたセツがビクリと身をかがめた。母屋からは仁蔵が何事かと血相を変え飛んできた。つい痲癩を起こしてしまったとお清はわびた。

「まあ、それならいいのですがね」

仁蔵は疑りの眼差しをセツに向けた。含みありげな言葉にお清は違和感を覚えた。しかし聞き返すまでの意欲もなく、そのままにした。

「そういえばお清さん、新しい着物でも仕立ててはみてはとご主人様が言っておられましたよ。ふさぎ込んでいても何ですし、いかがですか？」

先ほどまでとは別人のように仁蔵は笑顔を作った。庭ではセツが飛び散った湯飲みのかげらを前掛けに集めていた。

「もう見せる人もいないからいいよ。」

仁蔵はめげることなく説得を続けた。

「そういわずに、何でも京から金糸銀糸のいい帯が入ったというはなしです。一目だけでもご覧になってみたらいかがですか？それに、一人で見るのが気が進まないのならうちのお嬢さんもご一緒するというておられます。どうですか？」

九平にお絹という16になる娘がいるのは知ってはいた。しかし、セツ以外一度も母屋の者達と顔を合わせたことがない。クルミ殻のような顔の父親からどんな娘が出来たのだろう。着物よりその娘に興味を湧いた。

「あたいとじゃお嬢さんも落ち着いて反物を眺められないんじゃないですか？」

実をいうとこの申し出はお絹からのものだと仁蔵は打ち明けた。普段、気遣いなど出来ぬおてんば娘が言い出した提案、父である九平が一番驚いたらしい。おそらく自らも、お清のおかげで流行病が直った礼をしたいのだろう。おなごにしか思いつかぬ気の利いたはからいと久平は喜んだ。それを聞いたお清は少し間を置いた後、なにやら思いついたように頷いた。

「そうだ、なら、セツも一緒にお願ひするよ、この娘も着た切り雀でも一枚ぐらい着物がほしいだろうから。それがいい」

普段から親身に世話をしてくれているセツになにかしてやりたいとずっと思っていた。しかし自分には何もしてあげられる事がない。ならばよい機会だ、かわいい妹に離れた姉が贈り物をするような気分を味わいたかった。

「いいですよ、女中になんかかまうこっちゃありません。ほらセツ、繕い物がたまっていると奥様がよんでらしたぞ。早くいけ」

追い払おうとする仁蔵の手を払いのけ、セツを自分の元に呼び寄せた。セツは縁側に腰をかけ、自分はどうしたらいいのかと仁蔵に目で救いを求めた。それに気づいたお清は仁蔵を睨み付けた。

「いいのよセツ、貴方が来れないようならあたに行かないから。別にいきたいわけじゃないんだもの」

そういわれると仁蔵も認めぬわけにいかない。しぶしぶ了承する顔にメッキの剥げたやる気のなさが見て取れた。身の置き所のないセツは申し訳なさそうに頭を下げ、離れの畳にもあがらず庭を歩いて母屋の方へ足早に消えた。仁蔵は舌を鳴らした。

「じゃあ、明後日、使いの者に反物やらなにやら取りにやらせますから、昼にということでよろしいですか」

「呉服屋さんが来るんじゃないの？」

「ええ、いくら病人が少なくなってきたとはいえ流行病ですからねえ。街の者は来たがりませんよ」

離れにいと外の様子など知る由もない、だが仁蔵の言葉に村自体、未だ病の中にいるのだと痛感した。いつになったら終わりがくるのだろうか。ただ終わりが来たとして、ぬるま湯のような暮らしに安住した自分がこれから先、果たして独り生きていけるのだろうか？以前は生きる目的などなくても野犬のように毎日を過ごしていた。なのに正直、今は何をどうしたらいいのかさえ解らない。あれこれ考え始めると着物のことなどどうでもよくなった。急に不機嫌になったお清に仁蔵も気づき、付き合いきれぬと早々に部屋を出て行った。独りになったお清の膝近く、しょうこにもなく黒猫が忍び寄ってきた。叩くふりをして手を振り上げてみたが逃げる様子もなかった。のろまなお前なんぞに俺は叩けないとタカをくくっているように見えた。黒猫はそのまま日の当たる畳の上に寝そべりすやすや昼寝を始めた。どうしてこんなに大胆でいられるのだろうか。塀の内と外を行き来する恐れを知らぬ生き方を羨ましくおもった。

当日、お清は母屋の広間に案内された。離れとは比べものにならぬほど広く、50畳程の畳に色取り取りの反物が七色の川のように広げられていた。男どもは門外漢と同席せず、案内役の年増女中がお清の肩にあれやこれや反物をあて始めた。無理を言って同席させたセツは着物を眺める暇も与えられず、先輩の女中にこき使われ走り回っていた。しかし肝心のお絹の姿がない、女中はそのうち来るだろうと素っ気ない返事をした。

「これなんか今、京で大変人気の品だそうですよ。御店の若い娘達がみんな欲しがるもんだから品薄でなかなか手に入らないんだと呉服屋が話してました。どうですか？あててみますか？」

女中は返事も待たずに金を織り込んだ帯を身体に当てた。

「あら、いいは、素敵、これになさいよ。そうこれがいいは。とするとあとは帯ね」視線の先には帯はもとより、小間物を入れた桐箱がいくつも並べられていた。珊瑚の紅玉簪にべっ甲の櫛、滅多に手に入らない高価な京紅までが揃っていた。こんなものを買ってもらえるお清が羨ましい、声にならないため息が自然と女中の口から漏れた。正直、お清は後悔していた。普段使いの反物が用意されるとばかり思っていたからだった。なのに来てみれば見合いか芝居見物にでも着ていくような立派な物ばかり、似合うはずもなければ着ていくところもない。

「でも、あたいには・・・」

「何を言ってるの、こんなこと滅多にある訳じゃないのよ。遠慮したらそれこそば

ちがあたるわ、ああ、まってこの反物も捨てがたいはね。うーん、私20年若ければこっちを選ぶかも。迷うわね・・・」

とうとう女中は自分の身体にも反物を当て始めた。早口で事を進める女中にお清は閉口した。すると背中の中が開き、若い娘が入ってきた。久平の娘、お絹だった。淡い青に染め上げられた絹の着物に銀の波模様が織り込まれた帯、髪には阿古屋貝が散りばめた黒漆の櫛を挿していた。お絹は畳に並べられている品々を一別すると口を曲げた。

「あら、たいした物がないのねえ。こんなものばかり呉服屋は用意したの？うちも低く見られたものね。なさけない」

女中は顔を引きつらせた。しかし、それをすぐに愛想笑いに変え手をもんだ。

「ええほんとに。あそうそうお嬢様、こちらがお清さんです。」

久平に似ず面長、目は小さな一重、鼻は高く、おちょぼ口、軽くおしろいを叩いた顔は一言で言えば狐のようだ。セツは慌てて座布団をお絹の前にしいた。

「その顔見たら見たら解るわよ」

はっとした。離れに暮らしてこの方、他人からあからさまに顔をどうのと言われることはなかった。自分では解っていても6つ年下、16の小娘にその事を指摘され胸に針が突き刺さった。ゆがむお清の顔、それを見て反対にお絹の頬は緩んだ。

「ご免なさい。そんなつもりで言ったんじゃないの。おとつつあんから貴方の話は聞いているから。ほんと顔も手も・・・痛々しい。お可哀想に、おつらいわねえ」  
そうは言いながも手ぬぐいを鼻に当て、気味悪そうに顔をしかめた。女中はセツに目配せし、何とかしなさいよと顎を小さく振った。

「どうしたの、そんな顔して。せっかく楽しんでもらおうと思って準備させたのに」  
言葉に心はなく、さもつまらなそうに反物を眺めた。そして懐からもう一枚、手ぬぐいを取り出すと汚い物でも触るようにつかを捲った。3人の視線が畳をすり歩くお絹の足袋を追った。

「で？どれにするか決めたの？」

「いいえ、どれも気が進まないとおっしゃられて、あの、まだ」

「へえ、もしかしたら夜鷹してたって聞くから裸にゴザをまくほうが落ち着くのかしらあん？」

さすがに耐えきれなくなったお清は背を向け広間を出ようとした。甲高い笑い声が部屋中に響いた。振り返ると胸に手をあてお絹がこちらを指さし笑っていた。もう黙ってはいられない、手を払いのけお絹の左の頬を思いっきり叩いた。まさか自分に手を上げるとは思っていなかったのだろう、お絹はよろめき畳に倒れた。かけよる女中、まだたりないと前に出るお清、セツはただ動けずにいた。

「なにするのよ、あんた正気？」

「それはこっちの台詞さ、喧嘩売ってきたのはそっちだろ。あたいはべつに反物眺めに来たんじゃないんだ。久平の娘が見たかっただけさ。もし鷹が鷹を生んだらどうしょうってね。でもほっとしたよ。やっぱり鷹だったっね、いや？カラス？どっちでもいいや。ほっとしたよ」

女中は必死に二人を引きしなそうとする。しかし努力もむなしく互いに唾がかかる

ほど近づき目を血走らせた離れようとしな。いつとっくみあいになってもおかしくなかった。

「笑わせないでよ。おとつあんに世話にならなきゃ生きられない膿にわくウジ虫でしょ。だれもあんたを人だなんて思っていないは。それか解らないなんてホント可哀想」

せせら笑いは勝ち名乗りとでも言わんばかり、もう誰にも二人を止められなかった。

「ならそんなウジ虫のおかげで助かった死に損ないはどうなるのさ。ええ、あんたの身体の中には今もあたいの膿がぐるぐる巡っているんだ。嫌ならどうしょうっていうんだい。礼を言われこそすれこんな嫌み受ける覚えはないね。」

まさに核心をついた一言だった。お絹は一気にぶるぶると震え声をうわずらせた。

「あんたの世話になんかなりたくなかったは。熱でうなされているときに無理矢理飲まされた薬がそうだったたけよ。そんな気色笑い物だと知っていたら死んだって口になんかしなかったは。今もこの身体が気持ち悪くて吐きそうよ。」

「なら死ねよ、今から死ね、すぐ死ね。止めないよ」

なじるほどにお清の奥底に澱のように溜まった苦悩が薄れ、快感に変わっていく。こんな小娘泣かしたってかまわない。お絹は言葉に詰まった。この悔しさをどう晴らしたらいい。すると何を思ったのかセツの着物の袖を引き寄せ畳に倒した。悲鳴とともに着物の裾がめくれ、白い太股があらわになった。女達の視線が集まった。顔を赤らめ裾をもどそうとするセツの手をお絹は掴んだ。次の瞬間、小指をとり逆方向にひねり上げた。

「痛い、お嬢様、堪忍してください。痛い、折れる、きゃ、痛い」

それでもお絹は平然と小指を押し曲げた。女中もお清もあつけにとられた。何の為にこんな事をしているのか。このままでは本当に折れてしまう。周りの心配をよそにお絹は満足げな顔で意味深な言葉をもらした。

「静かにしなさいよ。セツ、あんたがこの化け物みたいな女を一番憎いと思っているんでしょ、じゃなきゃ今頃あの男と」

「やめて、それ以上言わないで」

セツの顔色が変わった。すかさずお絹は指を離し、今度はセツの着物を思いっきりめくり尻を人目にさらした。

「もう堪忍してください。お嬢様。後生ですから。」

いやがるセツの髪をお絹は掴みおもいっきり叩き倒した。バンと乾いた音がした。それでもセツは抗うことなく耐えている。まるで吹き荒れる嵐が早く去ってくれと願うように見えた。

「なんであんた、止めないの、それにあの男って誰よ？」

お清は傍らで固まっていた女中の片腕をつかんだ。心を読まれたくないと女中は目を背けた。自分以外が知る公然の秘密、それも自分に関わる重大な事あると確信した。お清がお絹ににじり寄った。足下には反物が渦を巻き、簪から剥がれ落ち散らばった細工が日の光を受けキラキラ輝いていた。とうとうセツが声をあげて泣き出した。女中でさえどうにも手に負えないと俯いた。

「いいこと教えてやるは。この女とあんたの男は出来ていたのよ、嘘じゃないは。」

この家の者ならみんな知っているは」

次郎に愛されていた実感は今もお清の胸に残っている。そんなはずはない。しかしセツも女中も押し黙り、反論しようとはしない。唇からは血の気が引いた。

「信じられないって顔しているわね。無理もないは、聞いたところじゃあんたが夢見心地でおねんねしてる最中、二人は離れ奥の部屋でちちくりあってたっていうんだから。ほんと、いい根性してるはわよ。ばれないとでも思っていたのかしら。それとも覚悟は出来ていたのかしら。まって、と言うことは浮気じゃなくて本気だって事よね。ねえ、そうなんでしょ。セツ、どうなの」

お絹は愉快でたまらないとはしゃいだ、その傍らでセツは両手と額を畳にこすりつけ、ごめんなさいを繰り返した。妹のように思っていたセツに裏切られた。それもお絹という高慢な娘に女の誇りををへし折られてしまった。この世を去った男だというのに寝取られた悔しさがお清を燃え上がらせた。足下に転がっていた簪をお清は手についた。多量の血が沸き出し、瞬く間に着物が赤く染まった。女中が右手を口にあてぶるぶると後ずさりした。しかし、お絹は話をやめようとしなない。

「あんた達ばかよ、ろくでもない男一人を奪い合うなんて。よっぽど寂しい女ね」それ以上言わせない、お清はお絹に詰め寄った。

「あんたに何がわかる、あの人はやっとできたあたいの家族だったの。ずーと死ぬまで一緒に暮らすはずのだったの。あの人しかいなかったの。」

「そっちはそうでも、向こうはそう思っていなかったのよ。だからよけいな事考えて殺される羽目になったんじゃない。もとはといえばお清、あんたが無理矢理、亭主にさせたからいけないんじゃない。自業自得なのよ」

「まって、殺された？あの人は心の臓の発作で逝ったんじゃないの？違うの？」お絹は我に返った。決して口にしてはならない秘密まで口走った事に気づいた。しどろもどろに言葉、手に取るような焦りが見て取れた。逃がすものか、お清はセツの背中に刺さっていた簪を引き抜き、お絹の頬に押し当てた。

「もう遅いよ。あんたはまだ何か隠してる。さあ、はきな」女中が悲鳴を上げ逃げていく。旦那様、旦那様、大変です旦那様。遠ざかっていく足音を聞きながらお清はお絹の着物の襟をんだ。

「死にたいならだまっていらいいさ。なに、傷一つ無いこの顔を引き裂いて目をくり貫くだけよ。もだえ苦しむがいいさ。さぞ痛いだろうねえ。そしてあたいより醜い顔であの世に逝くんだ。いっておくけど脅しじゃないよ。もうどうなったってかまうこっちゃんないんだ」

恐ろしさでお絹は立っているのもやっと、なぜこんな事をしてしまったのだろうとようやく後悔した。子供の頃から母親に口を酸っぱくして言われた。後先考えず思ったままを言葉にしてしまう性分はいつか身を滅ぼすと。しかし、庄屋の娘に楯突くものなど村にはいなかった。たとえ口答えしたとしても終いに折れるのは相手であり、強気な姿勢さえ貫いていれば大方思い通りになる。それが幼い頃からの経験で確信した常識だった。だからこそお清も自分に跪くとたかをくくっていた。初めての経験にお絹の思考は停止した。そうしている間にも簪の先が皮膚にくい込んでくる。事は通り、一切迷いが感じられない。簪に着いていたセツの血が白い肌につ

たい落ちた。息をすると肌を突き抜けそうで怖かった。かろうじて動かせる唇が真実を語り出した。話しが確信に近づくにつれ、お清の鼓動は早鐘を打つように暴れだした。あの夜、次郎は久平の本当の目的を知った。膿をつかい農民から金を巻き上げ、更に他の村々へ病を広めている事。永遠に飼い殺されて生きるしかない現実。とどめは嘘で固めた異国人医者の話だった。

「そんな暮らしに疲れ果て、次郎とかいう男はセツに逃げたのよ。」

健康的な美しさを漂わせるセツに嫉妬を感じなかったと言えは嘘になる。しかしそんな感情は子供の頃から常に同姓に抱き続けていた。今に始まった事ではない。それに、もうあの頃とは違う、そうお清は自分に暗示をかけていた。

「女の身体に溺れることであんたの男はぎりぎり踏みとどまっていたの。なのに、このセツは本当のことをばらしてしまった。そんなことをしてもどうにもならないのに・・・馬鹿なのよ」

次郎は怒り狂ったという。この秘密がお清に知られるのを久平は恐れ、心の臓の発作を装うため多量のしかも粗悪なアヘン次郎にもった。あの夜診察した男は父親から看板を受け継いだだけの名ばかりの藪医者、間違っても死因を見抜けないとふんだ。夜更けに呼び出された不機嫌さも手伝い、案の定、久平の期待通りの見立てを下した。父の謀はいつも細部に至るまで完璧かつ大胆なのだとお絹は言った。お清は笑った。笑うしかなかった。信じていた次郎の心が自分から離れていた事に気づきもしなかった。今思えば夫となった次郎の優しさは消して枯れる事のない泉だと疑いもしなかった。多くの男に抱かれたはずなのに、いざ我が身の事となるとそんな経験は何の役にも立たなかった。恋に盲目な女が男に寄りかかっていた。ただそれだけのこと。はっとした。あの日以来、久平に心を許しかけている自分がいた。なんと愚かな生き物なのだろう。もう、他人ばかりかもう自分さえ信じられない。虚無感に押し流されそうだった。お絹の言うとおりでとおもった。涙さえこぼれない。家の奥からバタバタという無数の足音が近づいてくる。久平達だろう。奴らが来る前に娘を殺し、自分も死ぬ。極楽にいけなくてもかまわない。もう、悲しんでくれる人もいいのだから。お清は握りしめる簪に力を込めた。不意に背後から突き飛ばされた。虫の息だったセツが最後の力を振り絞りったのだ。

「やめてください、おねがい」

セツは身体を返しお絹の盾となった。肩で息をする度に傷口からあふれ出す血が足首をつたい畳に広がった。お清はセツを睨み付けた。

「どきな、どきなよ、どけえ」

「私は恨まれても仕方ありません。貴方を裏切りあの人を見殺しにしたのも。でもお嬢さんに手をかけることは止めて、何の罪も無いじゃないですか。」

「罪がないなんて言わせない。九平の血を引いているだけで十分罪よ。それにこの娘が死ねば久平も思い知るは。自分が犯した罪で我が子が死ぬ羽目になったんだって。そう、あいつを殺すよりずっと辛い後悔をあじあわせてやるんだ。」

顔面蒼白のセツは胸に手をあて、息も絶え絶えに首を振った。その間にも血がどくどくと吹き出していった。あたり一面、おびただしい血だまりになっていた。

「後生ですから。私だけで堪忍してください。地獄に行つてつぐないますか・・・」

言葉を結ぶことなくセツは畳に崩れ落ちた。ぴくりとも動かない体の下でお絹は頭を抱えていた。すぐそこまで足音が迫っていた。突然、背中で猫の声がした。振り返るとあの黒猫が必死に何か訴えていた。そして庭の方へ顔を向け、ついてこいと小さな足で走り出した。はっとした。そうだ逃げなくては、もうここにはいられない。なぜ自ら死を選ばなかったのか、後になっても上手く説明できない。認めたくはないが一つ理由を上げろと言われたなら、心の奥底ではやはり生に執着していたのかも答えるしかない。あれほど死を待ち望んでいたはずなのに、生きる喜びを知ってしまった自分は臆病になったのだろうか。お清はただ夢中で黒猫の背中を追った。屋敷の事なら隅から隅まで知り尽くしている、そう言わんばかりに黒猫は軽やかに地面を蹴った。一匹と一人は裏の茂みに飛び込み、家人も気づかない崩れかけた土塀の裂け目から屋敷を抜け出した。

線香の香り漂うほの暗い部屋、仏壇に揺らめく蠟燭の火が真新しい位牌を浮かびあがらせた。2月前、首をくくり世をさった娘お絹のものだ。妻は心労で寝込んでしまった。襟の汚れた着物で九平は壁により掛かる。畳には空の銚子が何本も転がっていた。酒はほどほどにと仁蔵がとめても聞く耳を持たず、終いに目障りだと暇を出した。一つため息を吐き横になる、何でこんな事になったのか？悔やんでも涙が頬をぬらすだけ、久平は膝を抱え蓑虫のように小さくなった。思えばお清が姿を消した頃から兆しは現れていた。長らく続いていた流行病はすこしづつ下火になり、死人を流してまで目論んだ近隣村への拡散も尻すぼみで終わった。打ち出の小槌は消えた。潮時だったのかもしれない。九平は考えを変えた。稼いだ金で念願だった大阪に店でも出してみよう。流行病がないのだから当然、お清への執着心もなくなっていた。以前のように探すこともなく、半年を過ぎる頃には思い出す事さえなくなった。そして更に3月が過ぎた真夏、村に異変が起きた。

「いったいあれは何だったのだろう」

汗がしたたる熱帯夜、厠に出た九平は奇妙な光景を目にした。月明かりの下、緑の霧が屋敷の土塀を乗り越え流れ込んで来た。臭いなどまったくくない。あれはまるで雲の上にいるような不思議な感覚。おかしい、驚き急いで部屋に戻り妻を揺すり叩いた。しかし熟睡しきっているのかまったく目を覚ます様子がない。まるで眠り薬でも香がされたようだった。すぐに九平も睡魔に襲われた。落ちていくように記憶はぷつり絶えた。翌朝、目を覚ますと奉公人は何事もなかったように働いていた。夢だったのだろうか？昼少し前、半信半疑の九平の耳にあの霧の話がもたらされた。屋敷に出入りする髪結いが村の小作から聞いた話を女中にしていった。真夜、小作が鯉を獲ろうと仕掛けた網をあげに来た時の出来事、村の真ん中を流れる川から緑色の霧が立ち上り、みるみるうちに村全体を覆ったという。これは一大事、慌てて土手を駆け下ったところで記憶が途絶えた。そして今朝、雀の囀りに起こされ道端で寝込んだ事に気づいたらしい。髪結いが帰ってから似たような話があちらこちらから舞い込んだ。昼を過ぎる頃、村はその話で持ちきりとなった。その目で見えない者は狐か狸だろうと話をちゃかした。中には好奇心に駆られ、川に調べに行く

者もいた。しかし、いつもと変わらぬ澄んだ水が蕩々と流れ、別段変わった様子もなかった。結局、誰が死んだわけでもないのだからと真相は明らかにされぬまうやむやになった。だが、暫くして事態は思わぬかたちとなって現れた。女達に月のものが来なくなった。不思議な事にその全てがお清の特効薬によって病から救われた娘や女房達だった。月のものが遅れる事など珍しい事ではない、ばあさん連中は埃のかかった記憶で気に病む女達を慰めた。はじめは誰もが同じように軽く考えていた。しかし現実には残酷だった。半年過ぎでも事態は何一つ変わらず、日頃から男子を産めといわれ続けていた女房が川に身を投げた。子供を作れなくなった女など馬より悪い、同じ女である姑にいびられ思いあまっていたの事だった。そんなギスギスした村の雰囲気居心地が悪いのか、男達は村の外へ遊びに出るようになった。中には妻がいるにもかかわらず、帰らぬ者も現れた。女遊びで済むならまだいい、深刻なのは村の娘達に縁談が来なくなった事だ。子供が欲しければあの村の女だけは嫁にするな、そんな噂が広まっていた。流行病で多くの者が死に、僅かに残されただけがえのない娘達だった。なのに今や厄介者扱い、耐えきれなくなった者が見切りをつけ、次々と去っていった、村はあっという間に荒廃し、老人ばかりになった。九平の娘、お絹も例外ではなかった。九分九厘、まとまりかけていた城下、両替商の次男を婿養子に迎える縁談も流れた。それ依頼、ぷつぷり見合いの話も来なくなった。月の物がくるようにと久平の妻は高い薬を飲ませた、しかし効果はさっぱりだった。お絹は一人部屋に閉じこもるようになり、しばらくすると精神に異常を来した。奇妙な声が昼夜を問わず聞こえ、気味悪がる奉公人達が歯の抜けるように辞めていった。ある朝、ずっと聞こえていたお絹の声がパタリとやんだ。母親がそっと扉をあけると鴨居に組紐をかけぶら下がる娘の姿があった。お絹の死は九平から欲をそぎ落とし、抜け殻にした。息をするのもやっとの日々、妻は床についたつきり、みるみるうちにやせ細っていった。もう、屋敷の火は消えたも同然だった。

「誰か、酒を持ってこい」

徳利を壁にたたきつけ怒鳴り散らす。しかし、待てど暮らせど足音の近づく気配もない。残っている古参の女中は如何せん少々耳が遠い。仕方なく九平は重い身体を抱え部屋を出た。台所へ行く途中、妻が養生する部屋の前で足が止まった。

「奥様・・・、奥様」

叱りつけようと探していた女中が九平の妻にすがり号泣していた。ああ、逝ったのだなと直感し、正直ほっとした。これで妻の嘆きを聞かされる事もない。気の抜けた九平は草履も履かず、屋敷を彷徨い出た。空には赤い光を放つ月が雲の切れ間から覗いていた。久平はどこへ向かうでなもなく、ただ身体だけがふらふら前に進んだ。すると、どこからとなく猫の声が聞こえてきた。うつむき加減の顔を上げると薄暗い田圃道の真ん中に二つの目が輝いていた。

「ニャーゴ」

猫は一鳴きすると身体を返した。鈴でもしているのだろう、闇にかすむ小さな背中が上下するたびにチリンチリンと音がした。導かれるように九平は鈴の音を追いかけた。月は息を殺し事の成り行きを見ていた。流れてゆく景色の中に住む者のいなくなった廃屋が幾つもあった。手をかける者もなく、朽ちて止まった水車小屋を抜

けると橋のたもとに出た。ほらこっち、猫は欄干に飛び乗り橋の真ん中へと九平を導いた。面白いやつだと背中をなでようとした。気安く俺に触るな、猫は鋭い爪を九平の手にくい込ませた。カッとなった九平は叩き落とそうと手を振り下ろした。ひらりかわす猫、肩すかしを食らった九平は足を滑らせ橋の外へ落ちた。しかし間一髪、両手は欄干に残り、身体は橋の外にぶらかった。足下から這い上がる川の冷気、昨夜の雨で水かさが増しごうごう流れ下る水音、60半ば初老の指が支えるにはあまりに重すぎる身体、あっという間に九平の体力と気力は奪い取られていった。「おい、だれか、だれかいなか。助けてくれ」

村がにぎわっていた頃なら若者連中が夜ばいだ何だと闇夜に紛れ悪さしていた。しかし、今となっては昼間でさえ出歩く者もない。恐る恐る下を覗くと口を開けた鯉の群れ水面を蹴って飛びはねていた。これまでかと九平は項垂れた。

「ねえ旦那、こんなところで何をしているの」  
月明かりを遮る人影が九平の顔にかかった。声のする方へ顔をあげると髪の高い女が腕に幼子を抱え、橋の上からこちらを見下ろしていた。ただ、月を背にしている顔は見えぬ誰かもわからなかった。

「助けてくれ、落ちそうでな」  
「ほんと？、身投げでもするつもりだったんでしょ。じゃなきゃ夜更けにこんな所へくるかしら」

「ほんとうだ、頼む、早くしてくれ」  
「旦那、嘘つくの得意だからわかんないは。そうでしょう。九平さん」  
どこか聞き覚えのある声だった。記憶をたどり思い当たった女はただ一人。

「もしかしてお清か、いやでも」  
「あら、覚えていてくれたなんて嬉しい。そうよねずいぶんとお世話になったもの」  
女はうなじの後れ毛を整えるとゆっくり身体を返した。すると見たことのない美しい女の横顔が月明かりに顔わになった。あの吹き出物だらけの化け物の姿など微塵もなかった。

「うそだ、ちがう、お清は」  
「お清はなによ？ねえききたいは」  
口ごもる九平を女の目が刺した。

「言ってあげましょうか、お清という女は酷く醜い女だった。そうよね？。そうそう、覚えているは。旦那に鏡を押しつけられたときのこと。言いたい放題言ってくれたわよね」

突如、女に抱かれ眠っていた幼子が泣き出した。抱きあげ、愛おしそうにあやす姿は初々しい母親そのもの。なにがなんだか九平には理解できなかった。

「ワシはだまされんぞ、その話を誰から聞いた。だいいち、なぜ子など抱いている。おかしいではないか」

そうしている間にも九平の指は力を失っていった。猫は悪戯でもするようにその指を前足の爪で軽くなぞった。女はその様子を見て口に手を当て笑いを堪えた。

「疑り深いわね、でも無理ないは。昔のあたいは確かに人の顔していなかったものね。ねえそれよりこの子を見てよ。あたいの息子なの、可愛いよう。もう食べて

しまいたいくらい。」

女は九平の話もろくに聞かず、一方的に息子の愛らしさをまくし立て、これでもか言うほどに我が子に頼ずりした。その様は冗談でなく食ってしまいそうに見えた。

「ばかをいえ、もしお前が本当にお清なら、わしを憎む事はあっても感謝などするはずはない。」

「驚いた、それはご自分がどんな惨い仕打ちをあたいしたのか承知なさってたって事よね。へえ旦那もそんな神経をお持ちになっていらっしやったのね」

「黙れ、お前に何がわかる」

声を荒げる九平の息はあがっていた。女はふふんと鼻を鳴らし、ゆっくりしゃがみ込んだ。ちょうど良いように互いの目線はが同じになった。頃合いを計ったように風が吹き、月にかかる雲全てを押し流した。ぼやけていた女の顔の輪郭が光と陰にくっきり切り取られた。信じがたいことだが、そこには確かにお清の面影があった。そのとき久平は気づいた。今の自分はお清に捕らえられた哀れな獲物でしかない。凍てつく冷気が2人の舞台を固めるように夜を研ぎ澄ました。

「そうね、解らないでしょうね。でも今となっては感謝してるの。旦那がいなければ次郎さんに合う事はおろか、この子を授かることもなかったんだもの。そういへは昔おっしやてましたよね。人の世は不条理だからおもしろいって、今になってやっと解りましたよ。それってつまり、もしかしたら思いもしないことも起きえるて意味よね」

一年半前、屋敷から逃げ出しお清が向かった先は以前、豊臣の残達と暮らしていた鬼子母神の洞窟だった。実際、そこしか戻る場所はなかった。久平が追っ手を差し向けるかもしれない、不安はあった。しかし、簡単に見つけられるはずがないという自信もお清はもっていた。なぜなら、そこは深い森の奥、洞窟の入口は山から流れ落ちる滝つぼのあったからた。水の膜に守られ、内から外の様子は見えても、外にいる者はそこに洞窟があることも気かない。豊臣の残党が隠れ家を選んだ理由がそこにあった。また、食料を得るにも申し分ない場所ともいえた。滝つぼには岩魚や山女が泳ぎ、春は山菜、夏に山芋、秋に食用となる実をつける木が群生していた。なによりお驚いたのは洞窟の壁から塩が採れることだった。長がまだ元気だった頃、お清に聞かせてくれた。この辺りは大昔、海の底にあり、地震などで長い年月をかけ地表に浮かび上がった、だから貝殻の化石も見つかるのだと。それを聞いて塩がとれるのもなるほどとお

清は目を丸くした記憶があった。ここを追われたなら生きていける場所はない。お清は覚悟を決め、再び暮らし始めた。そして二月過ぎた年明け間もない頃、身体の変異に気づいた。どうにも熱っぽく、酷い吐き気に悩まされるようになった。経験のないお清にとってそれが妊娠と気づくまで3月かかった。

「もしかして、次郎がお前に手を出したというのか？」

久平に問われてもお清は答えなかった。しかし、後れ毛をかき上げる仕草はなんといえない色香を漂わせていた。

「化け物みたいな女と寝る男がいるなんていないと思った？ほんとそう、でも男って我慢できない生き物なんでしょ？それに暗闇じゃあたいの方が一枚上なの」

「はかな・・・」

瞬く間に日々が過ぎ、腹はカエルのようにふくれていった。酷暑が続く熱帯夜、とうとうその時はきた。身体の奥からわき上がる痛み、寄せては返す波のように徐々うねりを高くした。額から玉の汗がだらだれとしたたり落ち、どうにもじっとしてられない。すこしそよ風に当たりたい、はち切れそうな腹を抱え洞窟の外へと出た。用意しておいた薪に火を付け、水辺の岩にもたれた。お清はお産に立ち会ったことがなかった。しかし、不思議と怖という不安はなかった。夜鷹をしていた頃、仲間の一人が話してくれた。

『犬猫だって誰に教わずに子供を産むんだ。あたい達に出来ないわけないじゃないか、そのときになりゃあ自然と出てくるもんよ。』産婆を頼む金もなかった女の強がりだった。しかし、全くその通りだとお清は納得した。

「さあ、まってるから。ゆっくりでいいのよ。おっかさんに優しくしておくれ」お清は水温む滝壺に身を浸した。何故そうしたのは自分でも解らない。ただ違和感はなく、むしろそうする事で痛みが和らぐ気がした。更けていく闇の中で意識は朦朧とし、知らぬ間にか母トメの名を呼んでいた。あかあかと燃える薪の炎は柔らかな明かりをふくらませ、木々はもちろん、滝壺に沈む小石までくっきり照らし出した。澄んだ水にお清の腹が小島ようにぷかりと浮かんでいた。一緒に逃げてきた黒猫が肩を舐めた。励ましているつもりなのだろう。こんな気遣いの出来る猫だったろうか、苦笑しつつも気持ちが和らいだ。そして丑の刻あたり、絶叫が夜を裂き、枝で羽を休める鳥達を夜空に追いやった。ひねり出されていく赤ん坊の頭、折れんばかりに歯を食いしばった。どれほど時が経ったのだろう、身体がふっと軽くなった。我が身から伸びた臍の尾の先、水面を赤ん坊が漂っていた。やっと終わった。赤ん坊をそっとすくい上げた。すると、臍の尾に引きずられなにやら緑色の肉袋と一緒に浮かびあがった。それは恐ろしげな妖怪の頭に見えた。気味悪くなったお清は臍の緒もろとも切り落とし、放り投げた。緑色の肉袋は暫く浮き沈みを繰り返し、とうとう滝壺から生まれた小川の早い流れに捕まった。見る見るうちに遠ざかり、闇に呑まれて消えた。

「この子を胸に抱いて感じたの。あたいに溜まっていた毒が消えたって。どういったらいいのか上手く言えないけれど、とにかく羽が生えたみに身体が軽くて」

お産を境にお清の身体は変化を始めた。子供の頃から苦しんでいた痒みも嘘のように消えた。膿を溜めていた出来物は硬いイボとなり剥がれ落ち、その下から絹のような艶やかな肌が現れた。秋にさしかかる頃には自分かと驚くほどの変わり様を遂げていた。話を聞き終えた九平はあの夏の日、村に立ちこめた緑の霧の正体を悟った。村を流れる川の源流は深い山奥にあると聞いた覚えがある。とすればお清から吐き出された毒の袋は小川を流れ下り本流へと広がった。汚れた水は緑の霧となって村を飲み込んだのではないだろうか。

「この子があたいの不幸を払いのけてくれたのよ。ほんと、母親思いの良い子。」

「さて、お前を裏切った男の子供でもいいのか」

「そりゃ悔しいは、でも、もういいの」

一呼吸したお清の表情は晴れやかだった。

「夫婦になってと無理強いしたあたかも悪いの、思えば当然の成り行きだったのよ・・・それに、今は一人の男に未練を持ち続けるほど暇じゃないのよ。

わかるでしょ。」

愛らしく潤んだ大きな瞳、雪のように白い肌、ぷっくりと形の良い上唇、それはまるで浮世絵から抜け出た女、男達がほおって於くはずがない、お清の言葉の意味が容易に理解できた。

「これからは好きなように生きるの、久平さん、ありがとう御座いました。」

お清は両手を合わせ、深々と頭を下げた。気持ちに嘘はないのだろう。しかし、それは墓に眠る死者を弔うようにしか見えなかった。九平は唇をかんだ。もう指に力は残っていない。お清は立ち上がると軽く会釈をし、去っていった。傍らを黒猫が鈴を鳴らし追いかけていく。なんとも幸せそうな女の背中を九平は力なく見送った。